



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	モンゴル 人と教育改革（3）：社会主義から市場経済への移行期の証言
Author(s)	小出, 達夫; KOIDE, Tatsuo
Citation	北海道大学大学院教育学研究院紀要, 102, 161-193
Issue Date	2007-06-29
DOI	https://doi.org/10.14943/b.edu.102.161
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/26196
Type	departmental bulletin paper
File Information	102_161-193.pdf



モンゴル 人と教育改革 (3)

—社会主義から市場経済への移行期の証言—

小 出 達 夫*

Educational Reform after 1990 in Mongolia

Tatsuo KOIDE

【目次】 (前回に続く)

V 学校現場を支えた人の証言

31 U. ハダー (161)	32 G. スフバートル (164)	33 N. オユンハンダ (168)
34 S h. ガバー (170)	35 U. ルハーフー (172)	36 チュルンバル (175)
37 U. デルゲル (177)	38 D. ツァガーン (181)	39 D. アムガラン (184)
40 T. クシャイ (186)	41 中西令子 (190)	

V 学校現場を支えた人の証言

31 U. ハダー (Ulz.Khadaa ウランバートル, シャヴィー学校教員, 女性)

私は1953年トブ県のパヤンオンジュール・ソムで生まれた。ウランバートルから南に100キロほど行ったところにある。普通の遊牧民の子だ。しかし兄弟が大勢いたこともあり(10人)、子供がいない知り合いの遊牧民の家に1歳になる前に預けられ、そこで育った。そこでは一人っ子だった。新しい父母は互いに20歳も年が違っていた。父は教育を受けた人だった。母もいい人だった。私は大事に育てられたが、普通の遊牧民の子がすることはみんなやった。朝は4時に起きて羊を放牧し、家の仕事を手伝った。勝手な事は許されなかった。私は家では一人だったが周りのゲルには子供が大勢いて、お菓子を持ってよく遊びに行った。

家は、家畜の中でも馬が一番多かった。父は馬を飼うのがうまく、いい馬群を持っていて、優秀な競争馬を育てていた。父は私をなかなか馬に乗せてくれなかったが、5歳の時隣の人が来て私を馬に乗せてくれた。それから私は馬が大好きになった。今でも一番大切にしているのは馬だ。人と自然との対話では馬が一番いい。私は5歳から10年くらいナーダムに出たが、何回も5番以内に入り、賞やごほうびのお菓子をもらった。私が勝てたのも父がいい馬を育てたからだ。

私は女の子だったけれど馬にはほんとに興味をもった。いい馬がどこにいるか、どこへ連れて行ったらいいか、など私は知っていた。羊の乳搾りより馬との体験の方が楽しかった。賢い馬を父がもってきて、私に見せてくれた。私はそういう馬を大好きになった。大学へ入るまで私は馬と一緒に生活した。師範に入り夏休みに家に帰ると、馬は私を覚えていてくれた。馬は人間の言うことがわかる。ところが母は私が小学校2年の時亡くなり、父は師範の2年のと

* 北海道大学大学院教育学研究院名誉教授 (教育行政学)

きに亡くなった。けっきょく馬を親戚同士で分けるしかなかった。私はこうして師範の学生の頃遊牧文化から離れた。しかし私を育ててくれたのはこの遊牧文化だった。

モンゴルの子育てには二つの方法がある。一つは遊牧文化の中で育てることで、これは伝統的な育て方だ。もう一つは今の子がそうであるように遊牧文化と切り離して都市の中で、しかも2世代の小家族の中で育てるやり方だ。これが最近急速に広がっている。

遊牧の中での子育ては、親だけでなくほかの大人や誰もが助けてくれた。働きながら育った。いろいろ強制される中で育った。“育ちながら、あるいは育ててから学んだ”。そんなやりかただった。

しかし今のやり方は、家中だけで、少ない兄弟の中で、労働もない中で育てる。強制される事を嫌がる。子供に学習させる事がまず最初になる。学習すれば育つと思っている。“学ばせてから育てよう”という考えだ。と言うより学べば育つと思っている。だから親は子供が幼稚園を終え小学校に入ると、子育てを学校に任せっぱなしにする。

なぜこうなってしまったのか。教師の多くは遊牧文化を失うのは残念だ、何とか回復したいと願っている。しかしどうしたら回復できるか。「モンゴルの教育は国際水準に達した」、と言われるが、果たしてそうか。今の教育を進めている人は「人を愛する、自然を尊敬する」ということを大事に考えない。これは道德の基本だと思う。「人を尊敬すること」が子育ての中心にならないといけな。しかしそうっていない。教育省は「指導法だけ改善すればいい」という。これで教育がよくなると考える。親は子を学校に入れると任せっぱなしになる。これも教育省がそう考えるからだ。これは間違った方針だと思う。

子育ては教員だけではできない。親の協力が必要だ。このことを分らない教員が出てきている。親の参加を嫌がる。教育省も指導法が中心だ。私の世代の教員は授業中でも育て方を考えている。子供同士の対話や動きを見ている。正しい答えを出す事だけが授業の目的ではない。

しかし若い教員は学習させ、正しい答えをだす事だけが目的で、子供同士のことを見ない。

一つのクラスには5人くらい駄目な子がいる。その子の母親も父親も子育てに失敗している。親を失格している。クラスには保護者会というのがある。この会議を若い教師は使っていない。成績の発表の場と考える。そこには子供の話が出てこない。私はそこで子の育て方についても話す。子育ての話をするると親も熱心になる。小さい具体的なことからはじめないといけな。実践例を出して話す事が大事。そうすると母親は非常に関心を持つ。教師は「教えればいい」と言うのでは駄目で、こうした実践例を含めて親と子育て全体について話す事が大事だ。

たとえば私はよく自分の部屋に親と子の両方を入れる。そして自分の家のことについて両方から話してもらう。そうすると親はいいことだけを言う。自分の家族は子供のためにこんないいことをやっています、と言って“宝物”を出す。そのあと子供に話してもらう。すると親とは全く逆の事を言う。親は酒を飲む、タバコを吸う、乱暴だ、父母はけんかする、などなどいっぱい出てきてしまう。悪い事ばかりが出てくる。これがきっかけで親が変わり始める。親は“幸福ないい家庭だ”と思っているのに、子は“問題が多い家庭だ”と考えている。私はこうしたやり方をソロスの「子供の育成」という研修会で学んだ。

遊牧文化や遊牧生活を今の学校に生かすことはそんなに難しい事ではないと思う。しかし現実には、夏やすみの子供の実際の生活を見ると分かる通り、遊牧生活の経験をする子は非常に少ない。クラスに2-3件くらいで、それも1週間以内だ。親が関心を持たないのかどうか分からないが、これが現状だ。親が子供と一緒に郊外に出て、自然と接触する。遊牧生活と触れ

合う。こうした例は少ないがある。これを他の親にも普及できるといい。そうしたことを紹介した親向けのパンフレットがあるといい。また学校でこうした機会を作れるといいが、教育省はあまり考えない。何かきっかけが必要だ。

最後に、今のウランバートルの子育ての現状を示す一つの事例を紹介したい。あるお金持ちの親が子供を連れて私のところへ相談に来た。学校に入る年齢の子で、私立学校へ入れたらいいか、公立学校がいいかの相談だった。しかしその子は部屋に入ってくると泣き止まなかった。なかなか泣き止まない。こんな子は初めてだった。普通は学校へ入学するのを楽しみにする。

私はこの子を見ただけで親のことが分かった。そして母親に家ではどんな子育てをしているのか聞いた。自分の部屋を与えている、他の子と遊ばせないように家の中にいさせる。別荘にも行くが父母とだけで行き他の子供と遊んでは駄目よ、と言う。祖父母はいるがなるべく会わせないようにする。幼稚園には好きなときだけ行かせ、それもいいおもちゃを持っていく、そうすると友達がよってくる。学校には行きたいときだけ行かせようと思う、などといった話が出てきた。けっきょくこの子の問題は両親の問題だ、ということが分かる。この家庭では子供が育つ環境を親が与えていない、という事だ。私がこの子に何か言うと途中までは聞くが、あとはもう分かったから出て行ってくれ、やめてくれ、と言う。人とコミュニケーションをとれないのだ。こんな子がいまウランバートルでは育っている。

モンゴルのいま、私立学校を含めてうまくいっていない。人の言う事を聞かない子供が共通して見られる。新しいナショナルスタンダードには「子供を育てる」と言う用語がない。「学習させる」と言う用語が中心だ。私どもと離れたスタンダードになってしまった。モンゴルの実践世界と離れてしまった。教育省から学校に人が来ると、「スタンダードはどうですか」ということしか聞かない。この流れを変えないといけない。

今日小出先生がモンゴルの遊牧文化と学校教育を結びつけることが大事で、それができるかと言われたが、それはほんとに大事な事だ。考えていきたい。

小出コメント

ハダーはナラン(証言22)やルハーフー(証言31)と一緒にモンゴル語の1年生用教科書を共同執筆している。ナランの紹介で、私は始めてお会いした。ウランバートル市内のシャーヴィー学校(小学校)の教師だ。

自由に話しを初めてもらったが、最初の馬とのふれあいの世界がすばらしかった。こうした経験をできる人は今では少ないが、当時のごく当たり前だった。ハダーとの話の中で遊牧文化の豊かな世界が広がった。こうした経験を持つハダーのような人が少なくなっただけでなく、今のモンゴルではこの世界が大事にされていない。そこで遊牧とのふれあいの中での子育てと、そうでないところでの子育てについての違いなどを強調して聞いてみた。その結果が今回のヒアリングだった。

1 ハダーのようにモンゴルが直面している教育課題の解決を遊牧文明と結び付けて考える人は多いと思う。しかしそれが実現しない。バトボルド初中教育局長のヒアリングでも遊牧文明の重要性について彼は触れている(証言13)。しかし教育省の政策の中には実現されていない。私の証言に登場した教育界のトップの人はみな遊牧文化の中で育った人だ。彼らは遊牧生活の優れた文化性に触れた。にもかかわらずそれが昔話に終わっている。ハダーは子育てにとって遊牧生活がいかに重要で意義のあるものかを語った。ここにはモンゴル教育改革の目標の一つ

が明示されている。同時にそれを実現する条件が潜在していることも示されている。

私がモンゴルの教育改革について考えるとき遊牧文化と切り離して考えることはできないと気づいたのは国立大のアマルザヤと話し合った時だった（証言 21）。彼は私に社会主義と遊牧文化を切り離して考えることを教えてくれた。社会主義時代にあったすばらしい事の中には、社会主義の成果というよりモンゴル古来の遊牧文明の成果であるとみなさなければならぬものがあることを彼は強調した。その後私は、90年に選出された最初のモンゴル大統領オチルバトの回想録『天の時』（日本訳『モンゴル国初代大統領オチルバト回想録』2001. 明石書店）を読んでいるときこのことをさらに痛感した。オチルバトは新モンゴル建設のバックボーンに遊牧文明を据えた。ハダーの話聞きながら私はアマルザヤとオチルバトのことを思い浮かべた。

2 ハダーの場合もそうであるが、古くからのモンゴル教師は“学び”と“育ち”を区別し、両方が必要だと考えている。教育省は「モンゴルの教育は国際水準に達した」というがハダーはこれを批判する。彼女は「人を尊敬し、愛し、自然を尊敬する」というのが道徳の基本であり、このことの重要性を教育界の指導者は考えない、と言う。教育省は「指導法だけ改善すればいい」、それで教育は良くなる、と考えている。だから教師の仕事は“学び”の指導だけでよいとなる。これでは親の協力などは必要ない。教師は親の参加を嫌がる。実際こうした状況がモンゴルでは広範に見られる。今回のヒアリングでは、学校教育の中で“育てる空間”が失われていること、同時に“人を尊敬し自然を愛する”という道徳の基本理念が無視されていることをハダーだけでなくルハーフ、スフバートルも強調した。遊牧文明の後退と同時にこうした事態が進行している。子どもが育つ空間の縮小とその世界の閉鎖化は遊牧文明の後退と表裏をなしている。

32 G. スフバートル (Gombojav SUKHBAAATAR, ウランバートル第5学校教頭, 男性)

私は1953年スフバートル県バヤンデルゲル・ソムで遊牧民の子として生まれた。このソムは県の西方にあって、ドルノゴビ県との境にある。1961年、8歳でソムの学校に入った。当時は小学校4年、中学3年、高校3年だった。労働ポリテクニク学校とって、68年まで続いた。当時は基礎教育（義務教育）が7年制だった。68年度から8年制に変わり、高校が2年となった。私は68年に卒業したので旧制度では最後の卒業生となった。

基礎教育を卒業すると、高校への進学および中等特別専門学校への進学と二つの進路があった。私は教員になりたかったのでウランバートルの師範学校に入ったが、これは中等特別専門学校に位置づいていた。71年まで3年間師範に通った。そこで小学校の教員免許状をとった。

1971年スフバートル県に帰り、県南の中国国境に近いナラン・ソムの小学校の教師になった。ここに78年までいた。78年にさらに勉強をしたかったのでウランバートルの教育大に入り、生物教員の資格をとった。これは中等学校の教員資格で5年間必要とした。83年に再びスフバートル県に戻り、ナランソムの学校で教頭を2年間やり、85年から同じく県南のグリガンガ・ソムの校長になった。ここで98年まで13年間校長をした。90年の市場社会への移行はここで迎えた。近くには白鳥の来る湖があり、木も生い茂りきれいなところだ。南にいけば中国に入った。当時校長は県の人民革命党の委員会が任命した。現在のバトボルド初等中等教育局長は当時スフバートル県の教育局長で、13年間の校長時代はずーっと彼の指導を受けた。そして98年にウランバートルに移り第5学校の教頭となった。

90年の改革は教育セクターに大きな影響を与えた。社会主義時代は学校は安定していたし、

寮がありすべての子供が教育を受ける事ができた。寮を作って、必要な資材をそろえ、勉強できるいい環境を作った。国の援助もあった。遊牧民の子供は最低でも8年間の中等教育を完了することができた。この時代の教育レベルは高かった。

90年になり市場経済へ移行し、状況は全く変わった。91年のインフレはすさまじく、あらゆる資材は値上がりし、それだけでなく資材の供給もなくなり、食料も不足し、売買にはカードを使わないとだめになった。これが遊牧民の生活を直撃し、貧困が深まった。93年からは寮の食事代を親が負担しなくてはならず、これがきっかけで入寮者が激減した。85年には220人いた寮生が、93年には60人に減った。またドロップアウトする生徒も増えた。85年には710人いた生徒が92年には520人になった。ネグデルが解体する前に遊牧民の生活は貧困に陥った。

校長としては大変苦勞したし、勇気を必要とした。一つは教員の社会保障問題だった。給料は3-4ヶ月もらえなくなり、教員を辞めて商売などする人が増えた。特にいい教員がやめていった。代わりに経験のない力不足の教員が入ってきたので質が変わってしまった。何とか教員の生活を保障する方法を考えざるを得なくなった。学校には90年以前から学校附属の遊牧企業があり、学校所有の家畜がいた。羊800頭以上、牛40頭いた。そのために2人の遊牧職員を抱えていた。彼らにはお金を払うのではなく、増えた家畜を分けてやった。教員にはこの学校所有家畜の肉を提供した。またネグデルが使っていた古い住居を改修して教員に売った。これは評判が良く、教員が自分で内部を改修していい住居にすることができた。こうした努力で他のソムからも教員が来るようになった。

92年にはネグデルが廃止された。学校所有の家畜も処分せざるを得なくなった。当時財産の無いものは教員と医者だった。教員には給料の20%に相当する家畜を与えた。これについてはアイマグセンターの労働組合センターがサポートしてくれた。けっきょく学校には150頭の羊が残り、職員一人を雇ってこれを維持した。教員の生活保障問題について校長として大変苦勞したが、ソム職員の人たちと協力し、けっきょくそれまでの遊牧文化が育てた遺産によって何とか克服できた。

学校と遊牧とのふれあいは他にもあった。毎年9月になると7、8年生全員が授業以外の時間や土曜日曜に外に出て干草作りを手伝った。これはネグデルと協力してやった事で、ネグデルは子供達の食事を出してくれた。夏にはソムセンターの子供達を中心になってソム経営企業で乳製品の加工特にソフトクリーム作りを手伝った。社会主義下でのこうした経験は大変貴重だったが、90年以降農牧セクターが破壊されて以降はこうした経験はできなくなった。今やるとするば、ところどころにでき始めた農牧協同組合と協力したら何とかなるかもしれない。

今振り返ると、95年くらいまでは下降線をたどったが、96年くらいから徐々に安定し始めた。98年頃にはすでに学校は安定した学校になった。寮もでき、入学生も増加した。元の教員の中にも学校に戻ろう、という機運がではじめた。そして私は98年にウランバートルに移った。

移ってみて地方とウランバートルとの違いに驚いた。地方の教師は苦勞が多く、厳しく働かなくてはいけなかったが、教育に熱心だった。ウランバートルでは、教員にとっては苦勞が少なくいい環境だったが、熱心さが欠けていた。子供は地方と違って、情報も多く手に入ったし、知識なんかも発達しており、子供から出てくる問題は地方より少なかった。そこでつくづく思ったのは地方の教員をもっと大事にしないといけないという事だ。彼らの社会保障を良くしないと地方の教育は駄目になる、ということだ。このままでは地方の教師は都会に移ってきて、

地方には教師がいなくなる。今でも地方の子は減少している。生徒も教師もいなくなつてはモンゴルはだめになる。

第5学校はいい学校で、優秀な学校だと思う。教頭としては楽だ。地方にいたときと違って指導法中心に教員に働きかけられる。しかし、子供を見ると問題は多い。原因はいろいろある。

社会主義時代は、子供の育ち方や道徳を優先した。学校の外にいろいろな組織や団体があった。ピオニールもそのひとつだ。こうした条件が子供を道徳的に育てるのに向いていた。また授業中にも道徳を重視した。確かに自由はなかった。しかし子供は「国のために大人になるんだ」と言った気概を持っていた。今は自由になった。今まで禁じられていた事もオープンになった。これは大人にも影響し、大人がかわった。新しい教育改革は道徳を優先しない。ピオニールは廃止せざるをえなかった。道徳担当の教員もなくすしかなかった。今教育内容は立派になったと言われる。しかしその内容の中には道徳に関連する事はない。人間の生き方を考えたり、何が大事かを考える機会がなくなった。

もう一つ子供に悪い影響を与えているのは貧困問題だ。クラスにはいろいろな階層の子供がいる。このことで悩み、気持ちが落ち込む子供は多い。自殺やドラッグこそないが、気持ちとしてはそれに近い状態の子供が増えている。

こうした状況を変えるにはどうしたらいいか。一つ大事な事は教育省など国の政府が子供の育成政策を変えなければいけない。「人間は働かなければ生きていけない」ことを理解させないといけない。働く事により、家族の生活もよくなり、社会もよくなる。モンゴルは市場経済社会に移ったとき、「社会主義時代のことは皆悪い」といってあまりに批判しすぎた。社会主義時代にもいい指導法などはあった。たとえば80年代は専門職業教育を盛んにした。生徒は企業、工場、建築現場に行つてその仕事に参加した。もの作りの大切さを教える事ができた。地方では農牧業を体験し、都市では工業や建築業を体験できた。当時は“専門進路指導”という用語があった。この進路指導という用語は90年代になるとなくなったし、その活動も消えた。いま「今までの教育はアカデミックすぎた、実践的な教育にしよう」と叫ばれている。しかし何も実践していない。子供の育成を変えること、子供に働かせる体験をさせること、これがないと学校は発展しない。

以上のことは分かっているけれども実際にはできない。一つの理由は学校に自由に使えるお金がない、ということだ。今は教育省からお金が出て、区を通して学校に降りてくる。ここには区の判断が介在する。彼らは教育のことを知らない。それでいて用途について厳しく制限をつける。学校のニーズを直接区長に話して、その了解を取らないと何もできない。学校独自の事業をしようとするとお金が必要だが、それがない。また学校が会社や事業所など社会の組織や機関と交渉するとき、お金の保証がないと何か構想してもそれができない。学校では独自に職業教育など開発したいと思っている。あるいは複数の学校が協力して校長同士で意見交換し何か新しいことをしたいと思う。今できる事はこうしたプランニングを共同して教育省に出し、教育省に新たな政策作りを期待する、ということだ。

モンゴル古来の農牧文化と学校との接点も考えられる。土地法によって学校にも土地を与えられると良い。たとえば1,000 m²でも与えてくれれば、そこで野菜や果物を作れる。郊外で遊牧できる環境を作ってくればヨーグルトなどの乳製品作りができる。かつてスフバートルにいた頃学校のボイラーが壊れた。生徒と一緒にレンガを壊し、それがどんな材料でできているかを調べて自分たちでレンガを作ったことがある。そのレンガでボイラーを直し、学校を修理

した。こうした身近なところから取り組むことが大事だ。かつて“労働補償”という制度があった。生徒が何かを作り、その生産物を売ってお金を得た制度だ。こんなことができるようになるといい。

今の子供は大学に入りたいということだけで勉強している。大学にはいつて何をするか、将来何をして働くか、どんな大人になりたいか、などを考えない。これを変えていかないとならない。

小出コメント

スフバートルとはバトボルド初等中等教育局長の紹介でお会いできた。スフバートルは社会主義時代と90年代の厳しい時期をスフバートル県で学校教育に従事し、98年ウランバートルに出てきた。社会主義時代のいい面も90年代の大変な時期も、また現在の都会の教育状況も良く知っている。彼の証言には社会主義から市場経済社会への教育の移行の動きが良く描写されている。

現在の教育に対する彼の不満は、今の教育があまりに知に偏りすぎているという事だ。彼は社会主義の復活を望んでいるのではない。社会主義時代の教育をすべて否定し去る風潮を批判する。彼にとって継受すべきものとして職業教育の問題がある。今は知の教育重視で専門職業教育が軽視されているだけでなく、教育一般から「人間は働かなければ生きていけない」という事実が忘れ去られていることを批判する。教育省は「アカデミックな教育から実践的な教育へ」という掛け声をかけるが、中身は何もない。彼はこの中身がないことを畏怖する。

スフバートルはまた遊牧文化とのふれあいの重要性についても強調する。1990年以前、夏休みの期間モンゴルの子ども達は多様な遊牧生活・産業と触れることができたが、それができたのはネグデルの仲介が大きかった。しかしいまこの条件はない。彼はその代わりとして農牧協同組合に期待する。こうした機能を持つ農牧協同組合についてはまだ情報はないが、今後必ず出てくると思う。学校農場の建設を含め、この分野での彼の期待は大きい。

以上のような彼の話からわかるとおり、90年以前のモンゴルでは遊牧文化の中に学校があった。さらにこの空間にはピオネルなどの少年組織やネグデルなどの農牧業組織や加工企業があり、子供たちの育成に協力した。そこには学校・企業連携があり、職業教育を中心とする専門教育が普通教育と並行して重視された。社会人として成長していく上で必要な道徳観念を修得する場も大人と接触できるこの空間にはあった。こうした社会空間を90年以後の学校は喪失した。逆に貧困が子どもの生活を支配し、人間の生き方や労働について考える空間をなくし、子ども達は個別化され、付き合うべき異年齢集団を身近な世界から失った。90年以前には確かに自由はなかった。90年以降はそれがある。しかし自由を履き違えているのではないか。教育では“有用化”がいま叫ばれているが、それは実現されていない。実現できる社会空間を学校は失っている。こうした告発がスフバートルの主張にはある。

スフバートルの話でさらに注目できるのは1990年直後から始まる経済・生活危機の中で校長が果たした役割についてだ。多くの教員が辞めていく中で教員や生徒の生活保障が緊急課題となる。そうした中で校長による学校農場や学校企業の振興策が積極的な意味をもっていたことが彼の証言からわかる。そのリソースの多くは社会主義時代に蓄積されたものであり、その有効活用を校長が中心になり実現した。このような努力は今回のヒアリングでは、クシャイ(証言40)、アムガラン(証言39)、デルゲル(証言37)からも共通に聞くことができた。従来学校が持

ってきた財産が90年以後の教育危機の中で重要な役割を果たした事実がここにはある。しかしこうした制度は95年以降廃止された。学校と遊牧文化との有力な接点がここでも断ち切られた。

33 N. オユンハンダ (Nyam-Osor Oyunkhand, ウランバートル第33学校教頭, 女性)

私は1952年スフバートル県アイマグセンターのバルーンオルトに生まれた。遊牧民の子供だ。62年に小学校に入り、67年に中学を卒業し、ウランバートルの師範学校に入った。70年に師範を卒業しスフバートルに戻り、18歳でアイマグセンターの第2学校の教員をした。その後教員をしながら教育大学の通信制を受講し、国語の中等教員の資格を79年に取得した。79年以降は小学校教員をやめ中等学校の教員になり、81年から教頭をした。86年にウランバートルに出て第23学校の国語教員になった。91年からは第84学校の小学校の教頭、01年からは第33学校の高校担当の教頭になって今になる。この間スフバートルに16年、ウランバートルに20年、合計36年間教員をしてきた。うち20年間は社会主義時代の教員だった。

私が教員になる前、師範学校の教員の指導が良く、私はその頃小学校の指導案をすでにつけていた。親と一緒に授業を作ることも学んだし、子供にあった指導法を作り出す重要性も学んだ。そんなわけで教師になると授業以外に子供達と一緒に親の働き場所を見学する活動を組織した。親を尊敬し、家族を愛し、社会を知る、などがねらいであった。建築場所、裁縫・縫製所、変電所、木工所、印刷所、食品加工所などを回った。子供たちはアイマグセンターの子だから、遊牧の子はほとんどいなかった。見学後子供達は、それを絵に描いたり、文字にしたり、感想文などを発表した。働く事の大切さを学んだし、親と子の距離もなくなった。その後はラジオを聞かせてそれについての感想文なども書かせて発表させた。子供達は変わった。

こうした子供中心の学習活動は当時としては少なく、周りから注目され、全国の教員発表大会に出席し、2位をもらった。暗記中心の授業の中でこうした教師、親、子供の双方向の活動には意味があった。

91年にウランバートルに出て、第84学校で校長先生の協力を得て6歳児クラスを作り、6歳児の指導をした。これは6歳児入学を予想した実験活動だった。こうした活動を幼稚園と協力してやった。「幼・小総合学校」のようなものだった。校長はランバートルとあって、今国会議員をしている。残念ながらこの試みは途中で校長がいなくなり頓挫した。

今こうした授業以外の活動をしようと思ってもできない。教員は授業の回数で給料が決まる。月給制ではない。授業以外の活動をして給料にはならない。それに給料は少ないので教員は授業が終われば学校を出て、お金を稼げる場所へ行ってしまう。教員の勤務時間は最低週19授業時間(40分授業)あればよく、1日8時間学校にいて授業外活動もやるという制度にはなっていない。授業外活動をできない理由としてはこれが大きい。それに加えて学校2部制、3部制がある。子供達が午前クラス、午後クラス、場合によると夜間クラスに分かれている。これでは生徒は授業が終われば学校にいる場所がない。

社会主義時代は給料が十分補償されていた。教員は教育や子供との交流に全時間を使うことができた。子供は学校外にもいろいろ団体や組織があって、それに参加できた。教員は1ヶ月ごとに授業外活動のプランを作り提出した。たとえば、“親を愛する月間”、“自然を保護する月間”、“音楽月間”など。こうしたことも2部制の下ではできない。当時はTVがなかった。学校ですべての情報が手に入った。今は学外での情報の方がはるかに多い。学校は子供の魅力を確保できない。

私は今高校担当の教頭をしている。何にあたまを一番使うかと言うと、教育省との関係だ。最近、教育省は新しい政策を出すと明日からすぐやれ、という。現場では考える時間がほしい。しかしそれがない。たとえば今年から新しいカリキュラムで授業が始まった。そのためのシラバスがおりてきたのは8月半ばだった。9月から新学年が始まる。今年から新しく高校カリキュラムには「選択科目」と「専門科目」が入ってきた。今までは「必修科目」だけだった。選択・専門科目の授業科目の名前や単位数を知ったのは8月半ばだし、生徒から選択科目の希望を集め、時間表を作り、教員を確保する時間などなかった。「選択科目」であるにもかかわらず、クラス単位での履修を強制するしかなかった。専門科目にいたっては、「電気」「機械」などといった科目を担当する教員などいない。新カリキュラムの趣旨はわかっても現場で実行できる条件がつくられていない。それでいて教育省からは実行の点検が迫られる。

新教科書は入札制が取られ、同一科目でも2-3の教科書が用意され、そこから選ぶ制度になった。とはいえ教科書が現場に紹介されたのは新学年の開始直前だった。これでは教員どうして検討して選ぶ暇がない。知っている人の教科書を選ぶ、といった状況になってしまう。教科書検定制度になったので現場の教師なども審査過程に呼ばれることがある。しかしそこは執筆者、印刷会社などとの争いの場で、落ち着いて審査できる雰囲気ではなかった。新制度に移るというのに、こうした状況が続くのでは現場はまいってしまう。何か落ち着いて子供達の将来のことを考えたり、新しいことをしたいと思ってもできる状況ではない。

小出コメント

あらためて教育現場の深刻な状況をオユンハンダのヒアリングから知ることができた。彼女の証言から、学校現場と教育省との間にある落差を知ることができる。彼女にとっては教頭として新しい教育実践を生み出すことは夢に等しい。中央行政機関と学校現場には落差があるのは当たり前で、だからこそ管理職などの指導力量が重要となる。ヒアリングに当たって私が彼女に期待したことは管理職がもつ独自の指導力量についてであった。しかしとてもそうしたことを聞き出すことはできなかった。彼女が管理職として生徒のために何か新しいことを考えて実現する余裕はウランバートルの学校にはない。学校の教育課題はあまりに大きい、それを解決する条件に乏しい。

彼女の証言は現在のモンゴルの学校教育の問題点の核心をついている。給料を含めて教員評価がその教師の担当する授業時間数で決まる。授業外活動をしてもらってもそれは給与にカウントされない。教員には8時間勤務制度は適用されない。週当たり最低19コマを担当すればいい。それ以上の担当時数は給与には加算されるが、多くの教師は最低時数をこなせば学校にいる必要はなく、退校して別の仕事に従事する。給与制度が月給制になっていない。これでは“学ぶ”指導はできても“育てる”指導はできないし、しなくてもいい。

彼女はさらに具体的な問題点を指摘した。2006年から施行されたナショナルスタンダードでは高校カリキュラムの中に「選択科目」と「専門科目」が入った。その結果高校1年から生徒の希望により異なった学習コースを選ぶことができるようになった。しかし現実にはオユンハンダが言うとおりにこれらの科目を担当できる教師がいない。いずれ時間をかければ解決する問題ではあるが、これでは教育省と現場との落差は大きすぎる。国のスタンダードを国際化するのに急で、教育現場との乖離は大きい。分権化が進み、学校への権限委譲が進み、制度的に学校での裁量が大きくなったとはいえ、オユンハンダの指摘するような実情がある。こうした落

差を埋めることは行政自体の課題ではあるが、他方で彼女のように展望を喪失しているだけでも困る。改革の力が学校現場にあることを示す努力が求められる。管理職の多くはそうした努力をしているし、求めている。この分野での実証作業がさらに求められている。

34 S. ガバー (Sharav GAVAA, ウランバートル第6学校教員, 化学, 男性)

私はセレンゲ県西部のバロンブレン・ソムの出身で遊牧民のこどもだった。当時は中学を卒業すると各県から3-4人づつウランバートルの第1学校に転入できる制度があり、私によりウランバートルに出てきた。そして1956年に第1学校を卒業し、モスクワの化学技術研修所(Institute)に入った。まもなく帰国し国立教育大学の化学コースに入り、1961年に卒業し教員になった。

1989年頃教育大臣が化学の特修コースを私がいた第6学校に開く方針を出した。当時すでにウランバートルには第33学校と第5学校に化学の特修コースがあり、私がいた第6学校は第3番目の化学特修学校に指定された。私はソビエトのチバクサル市の化学特修コースで半年間研修を受けて帰国し、1990年にこのコースを開設することができた。全国から生徒を募集したところ170人が応募し、36人を採用した。ロシアからは教科書を持ってきただけで、それ以外は何も持ってこれなかった。

特修コースの授業内容は私が自分で作った。それまではウランバートルの生徒だけが参加していた化学オリンピックに私の学校からも参加して、女子学生の一人が銀メダルをとった。彼女は卒業後国立大学の化学にフリーパスで入り、大卒後はインドへ行き修士号を取得し、現在はモンゴルの化学アカデミー附属の化学研究所で研究員をしている。彼女が私の最初の弟子だった。その後毎年特修コースの生徒はメダルを獲得し、金4、銀8、銅4となった。さらに40人以上が別の奨励賞をもらった。

こうした実績を積んできたが、保護者から批判が出てきた。一クラスの生徒のうち5-10人だけが優秀生徒とされ、そのほかの生徒は無視されている、という批判だった。これはあたっていたので私は反省し、オリンピックの不参加者にも同じ問題を解いてもらうようにした。今では生徒全員が同じ扱いを受け、皆が勉強している。04年には32人中29人が医科大に入り、その他も他の国立大学の化学コースに入ることができた。

そのうちにまた批判が出てきた。化学の特修コース以外に、普通の化学授業のコースがある。これが軽視されているという批判だった。こうした傾向は全国的にも見られる傾向だった。そこで考えたのが私の名前をつけた“公開化学オリンピック”だ。化学に興味を持つ子供であれば誰でも参加できる公開オリンピックで、実は今日それを国立大でやっている。目的は優秀者でなくても、化学が楽しく興味を持っている子であれば誰でも参加できる。これを今年からはじめた。国内各地から1500人が参加した。

化学教育を全国に広めるために化学オリンピックを第7回大会から地方でも開催する事にした。そしてアイマグセンターの高校に近代的な実験室を作り、そこで教員の再教育をできるように提唱してきた。実験器具や材料の調達は大変なので、できるだけ身近なものを使って実験できるようにしている。公開オリンピックもウランバートルだけでなくエルデネットなど地方都市でも開くようにした。

特修コースの開催は授業料をとることができるので、それで実験環境もよくするようにした。2・3年前より特修コースの教育省配分予算を増額してもらい、うち2割を教員給料に当て、

残りの8割を物的環境の整備に当てている。コースの生徒はウランバートル全体から集める。第7学年のはじめに6学年卒業者を対象にして数学のテストをして選考する。自校の進学者を含めて採用するが、校長からは自校と外部からを半々にしてくれといわれるが、私は外部から7割とりたいたいと考えている。特修コースの卒業生はほとんど国立大学に進学する。6割が医科大学、4割がその他の大学となる。オリンピックなどでメダルをとった学生は医科大学よりも、モンゴル国立大学化学科にすすむし、科学技術大学の石油化学などにも進む。

社会主義時代と比較すると、社会主義時代は特修コースを認めるという考え方がなかった。平等が原則なので特別扱いはできなかった。私は特修コースの設置が夢だったので、90年以後になって教師が自分の考えで何かを創造できることはいいことだと考えている。子供の方も以前と比べ今の方が比較できないくらい伸びている。教師についていえば、90年以降いい教師が辞めたと言われるが、私はそうは考えない。教育を大事にする人が残った、と考えている。91・2年頃やめた教師には若い教師が多かった。私の世代の教師が残り、教育を支えてきた。90年代前半は特に大変だった。このとき社会主義時代のこともよく知っているいい教師が学校に残った。そして95年頃より徐々に改善し始め、やめた教師も戻るようになった。今でも苦しいと言われるが、90年代前半の事を考えるとはるかによくなった。私の場合で言えば、給料を16万トゥグルグ(Tg)もらい、さらに60歳を越えているので年金を14万Tgもらっている。これで生活は可能だ。多少は生活が苦しくても教育の仕事は大事だ。これはいい仕事だ。自分で頑張る教師が必要だ。

また、教育省が悪いのでいい教育実践ができない、という人がいる。国がいい環境を作らないから何もできない、と彼らは言う。私は自分で頑張り、他の人と協力してやってきた。やればできる。国だけを批判するのは駄目だと思う。たとえば教員の社会保障が悪い、とよく言われる。私は校長をしていた学校で教員各自が毎月2000Tg出し合い、学校資金を作った。教員に子供が生まれたり、親族が亡くなったり、災害を受けたときや、家をたてるなど、困ったときにこの学校資金を用立てる事をした。国がしないときは自分たちでいろいろ考え工夫する事が大事で、問題を他に転嫁しては駄目だ、と考えてきた。こういう考え方をしないと教育は良くならない。

小出コメント

久しぶりに骨のある教師に会えた。彼はすでに定年に達して年金生活に入っているが、なお学校で化学の授業を担当している。彼は、化学に関心をもち大学の化学分野に進学したい生徒を集めた特修コースの教師だ。ガバーからは通常の教師の常識的通念とは異なった話を聞くことができた。

通念とは違った見解の第1は、90年代前半に学校に残った教師は社会主義時代にあっても優秀な教師だった人たちで、教育に理解を持っていた人たちだった、という見解である。従来ヒアリングを通して確認できたことは、90年以降は優秀な教員を含め多くの教師が学校を辞め、学校教育の後退を食い止めることのできる人材は学校にはいなかった、という視点だった。今回ヒアリングしたスフバートル（証言32）からもこうした話を聞いた。ところがガバーは逆のことを言う。彼はウランバートルの第6学校という比較的恵まれた学校にいたからこうした証言をするのかもしれない。確かに私がヒアリングしてきた優秀な現場教師は社会主義時代から教育に熱心な人である。彼が言う視点で移行期の教育を見ることも必要だ。

注目すべき見解の第2は、教育省主導の教育改革に対する批判を学校教師からよく聞くが、ガバーからは聞くことはなかった。逆に自ら改革構想を打ち出し、それを実現していくエネルギーを彼はもっていた。彼は「私は自分でがんばり、他の人と協力してやってきた。やればできる。国だけを批判するのはだめだと思う」と断言する。改革は上からのベクトルと下からのベクトルがかみ合って実現する。上からのベクトルに過重な期待をかけてもだめで、学校現場に改革を実現する力がないと改革は進まない。ガバーにはそうした力がある。この点でガバーは先に紹介したオユンハンダ（証言33）と対照的である。改革のエネルギーは学校現場にあるという視点（仮説）は、私が得たいろいろな証言が実証している。オユンハンダもいずれはこのことに気づくと思う。こうした視点から学校現場を精緻に見ることが求められている。

ガバーの実践は確かに個性的で創造的である。ボトムアップ型の実践で、こうした余裕のある空間が90年以降学校には生まれてきた。とはいえ彼の実践はエリート養成に主眼を置く旧来からの“オリンピック”型の実践だ。だから政策的にも教育省からは優遇された。しかし彼は父母からの批判により軌道修正し、通常の普通クラスの化学教育にも改革の手を加える。その具体的な内容までこのヒアリングでは聞くことはできなかったが、彼は複眼的な目を持つにいたる。一般的に高校教育には基礎教育の重視という視点と、専門分野のアドバンストコースを重視するという視点の双方が必要となる。この点にガバーは気づいたといえる。その意味では彼の実践は05年の新スタンダードの先駆けとなったといえよう。

35 G. ルハーフー (G. Lkhaakhuu, 元教育大学小学校教員養成課程教員, 女性)

私は退職して10年になる。小学校16年、中学校3年、師範学校22年勤めた。

生まれはバヤンホンゴルのバヤンオヴォ・ソム。1942年生まれ。遊牧民の子だ。家畜はたくさんいた。5家畜全部いた。兄弟は7人で、兄が多く、2人は獣医、一人は経済を専攻し、一人は遊牧をしている。私は16歳で教員になったが、すぐアルハンガイの小学校教員養成所に入りなおした。1959年で、ここに4年いた。この学校は中等専門学校で、Diplomaしかとれなかった。そこを卒業してバヤンホンゴルに帰り、小学校16年、中学3年勤務した。私の夫は管理職（教頭・校長）で、子供は6人いた。いま2人が教員をしている。一人は教育大で技術職業教育を、一人はロシアで中国語を教えている。

私は1975年に19年間の教員生活をやめ、ウランバートルの教育大に入った。学士になりたかった。ここでモンゴル語・モンゴル文学を4年やり、学士号をとり、1979年教育大附属の師範（小学校教員養成課程）の教員になった。教育大は4-5年制で、中等学校の教員を養成していた。師範学校の教員になるために教育学や教授学などが別に開講されていた。これらは教育学研究室が担当していた。

けっきょく私は教員を41年間やったが、うち33年間は社会主義時代で、90年以降の移行期には8年間勤めただけだった。私が最初に赴任した学校はバヤンホンゴルのジャルガラント・ソムのブリガードにある学校だった。ブリガードは地方にできた生産拠点のようなもので、ここはハイドラグ産業地帯と言われて、小麦と羊毛皮革の生産で有名なブリガードだった。午前中遊牧民の子供を教え、午後大人に識字教育をした。今で言うノンフォーマル教育だ。この学校はこの地域の中心地だったので10年制学校だった。そのあと私はザグ・ソムの8年制学校に移った。ここは普通の学校で遊牧民だけを相手にした。

社会主義時代には教員になりたい人をよく選んで採用した。これが今と違う特徴だ。成績で

選んだわけではない。目的意識さえ良ければ教員になれた。教員の仕事には二つあった。一つは授業で、一つは授業以外の活動だ。授業では教員は生徒に「教え込み」、暗記教育を強要した。だから授業では子供との相互交流が無かった。一方的だった。しかし授業外の活動では子供と良く接触した。ジョネールの活動や援農活動など自然や大人の世界と触れた。ここで子供は大人に成長した。今よりも良い子供を育てる事ができた。今はこれが逆になっている。授業で子供と教師は相互交流を求められるが、授業以外では接触はない。

遊牧民の子育ては家庭内の教育が中心になる。これは子育てにとって非常に良かった。子供はまずこの集団の中で育った。今はこの遊牧文化の伝統が軽視されている。これ以外に、社会主義時代の学校は子供を社会に向けて育てた。団体の中で育てた。Social Workにすべての子供を平等に参加させた。今は社会に向けた教育は優秀な子供だけが中心で、授業以外の活動の意味はほとんどなくなってしまった。

かつては子供を教える事と、子供を育てる事(道徳)の両方に学校が関った。遊牧文明や伝統のおかげといてもいい。しかし、90年に急に市場経済化して、自由になった。ほとんどすべてを統制されていた社会から急に解放されて、人間は自由を歓迎した。全く違った世界が現れた。しかし自由を自分勝手とはきちがえた。子供達も好きなことをやっていいのだと考えた。勉強するのも自由、しないのも自由、教師に言われる筋合いはない、自分の好きにやる、となってしまった。親もそう考えた。自由には限界があり、責任が伴うことを理解できなかった。また教師も、自由の限界を教える事ができなかった。

私は師範の教師になってからモンゴル語の低学年教科書を作った。1982年が初めてだった。88年に学制が変わり8歳児入学から7歳児入学となった(90年までの2年間の試行に終わった)。そのための教科書も作った。教科書執筆の基準は教育省がつくる“プログラム”だった。今のナショナルスタンダードだ。これは当時教授学研究所というのがあり、ここと教育省が協力して作っていた。1998年に初めてナショナルスタンダードと言う名前に変更したが、それまでは“プログラム”とよんでいた。

1990年以降、私が編集執筆に関わった低学年用モンゴル語教科書で言えば、まず1991年に新しいプログラムができた。それに基づいて92年に最初の教科書(初版本)を出した。93年か94年にまたプログラムが変わったので95年に第2版(改訂版)を作った。その次が98年の新ナショナルスタンダードで、これにもとづき2002年に改訂版をつくった。2003年のナショナルスタンダードははじめて7歳児入学と小学校5年制を導入した(10年制中等学校から11年制中等学校へ)。これに基づいて2005年に全く新しい教科書を作った。これは師範学校のナランさんやニャムゲレルさんとの共同執筆だ。

90年以前のプログラムの作成にはわれわれ師範の教員は参加できなかった。教育大にあった教育学研究室の人が関係して作っていた。彼らは大学の教員なので地位は高い。小学校の状況など知らなくても良かった。だからプログラムの中身がハイレベルになってしまった。

90年以前は教科書(試案)ができると1年間試行期間があった。試行学校を全国のバグ、ソム、都市の学校から選び出し、そこで検討した。執筆者への注文、指導法の工夫、子供に望むこと、などについて全国から意見が寄せられ、教科書は修正された。こうした制度は90年移行なくなった。逆に2000年以降は入札制度になった。

90年以降の改革について言えば、92-97年の5年間だったと思うがDANIDAの支援が役にたった。DANIDAは師範学校と良く接触してくれた。私にとっては良い勉強になった。教

科書作りには役立った。子供の精神・年齢にあわせて教科書を作ると言う事だが、これについて詳細に教えてくれた。この間の事情については教育大のオユン教授（証言23）が良く知っている。またゴルバンエルデネ大の学長ジャチケン（国語教育）や、ブンデン（数学）も教育内容の改革に関わっていた。

90年以降の師範の変化についていうと、教員については90年以前から3つの基準が言われた。①研究すること、②教科書を作ること、③学生活動を支援すること、の3つだった。90年以降これを守る教員が少なくなった。学生の方でも熱心がなくなった。その理由に自由のはき違えがある。勉強しても良い、しなくても良い、それは自分が決める事だ。こうした考え方が出てきた。社会主義時代はこうした勝手は許されなかった。またかつては大学生は入学するとすぐ2-3ヶ月の援農作業をした。これは社会と接するいい機会だったが、今はこうした経験はない。おそらくこれからも無理であろう。良い教員を育てるにはどうしたいか、こたえはまだない。

（小出コメント）

ルハーフーには初めてお会いした。教育大のナランの紹介だ。「私みたいな昔の人を呼んでいただき申し訳ない。私でもまだ役に立つならお役にたちたい」とルハーフーは何度も言った。

私が彼女に聞きたいと思ったのは社会主義時代の教育の中で彼女がもっとも優れていると考えるものは何か、という事だった。社会主義教育といっても決して1枚岩ではないはずだ。モンゴル何千年の歴史の中に息づいてきた伝統が社会主義時代にも生きているはずで、社会主義とそこに混在しているそれ以外の文化との区別をできているかどうかが大それたと思う。良く見られる傾向はすべてを一緒にして社会主義時代の教育とくくってしまい、それらを全否定するか、或いはあいまいにして反省を徹底しない、ということだ。

以上の点を含みながら彼女の話聞いた。彼女は、社会主義時代の教育には授業と授業外活動の両側面があり、授業には教師と生徒との相互交流は無くこれを負の側面とし、授業外活動では生徒は教師と相互交流しながら自然や社会とふれあい大人になっていける豊かな環境があったことを強調した。そして現在この前者の側面は正されつつあるが、後者の側面がなくなっていることを問題とする。問題はこの後者の側面を社会主義に内在するプラスの側面ととらえるか否かである。内在する要素であるとする、その継受は難しい。しかしそれとは別にそれが遊牧文明などに見られる社会主義以外の歴史の伝統に根ざすものとすれば自体は違ってくる。

ルハーフー自身はそれほどこうした区別に自覚的ではなかったが、私との話の中で彼女は彼女が評価していたかつての教育の要素が社会主義というよりむしろ遊牧文化に根ざすものだという事に自覚的になった。彼女にとりこの点に気づくことは容易な事であり、むしろ自然なことであった。こうした話を彼女との間にできた事が私には嬉しかった。このことは90年以前の教育を知るもので、同時に90年以降を生きている人でなければ分からないことである。

また彼女は90年以降の教育には、“自由のはきちがえ”があり、自由とは“自分勝手”を意味し、従来あった教育における“強制機能”や責任観念の育成機能が喪失してしまった、と言う。教育を広く解釈し、教育には先行世代の文化継受という要素があると解するならば、そこにはある種の“強制性”が伴う。遊牧文化の中では遊牧民の異世代間での強制力が文化の継受・発展を支えてきた。また遊牧民の集団の維持には成員相互の責任感が不可欠であり、遊牧社会はこの責任感を育ててきた。学校生活から遊牧文化が後退した結果遊牧文化が持っていた

こうした社会機能は失われた。ルハーフーはこの点を指摘している。しかし“自由のはきちがえ”をいかに正すかについての展望を提示するにはいたっていない。「良い教員を育てるにはどうしたらいいか、答えはまだない」と彼女は言う。

なおルハーフーの話から大学の中で師範学校がどういう位置に置かれていたかがわかる。彼女は師範の教員になり小学校の教科書を執筆する。これは師範教師の職務に位置づいていた。しかし教育内容の国家基準である“プログラム”(現在のナショナルスタンダード)づくりには師範の教員は参加できなかった。それは高等教育機関である大学教員の仕事であって、中等教育に位置づく師範学校の教員の仕事ではない、とされた。そこには厳然とした区別があった。こうして小学校の現状に疎い専門家が小学校の教育内容を作るシステムができた。この状況は改訂ナショナルスタンダードが創られた2004年までなお続いた。また最初のナショナルスタンダードができた1998年までは社会主義時代に使っていた用語であるプログラムと言う用語が依然として使われていたことがわかる。

36 チュルンバル(スフバートル県第2学校教頭、大統領“功労教員賞”受賞者、男性)

私は1943年にスフバートル県の中央に位置するハルザン・ソムの遊牧民の子として生まれた。馬20、羊200、らくだ10、ヤギと牛が10頭くらいの平均的遊牧民だった。兄弟は2人で、兄はロシアの大学を出て鉄道に勤めていた。私は1950年7歳で小学校に入り、60年に10年制学校を卒業した。兄は8歳で私と同じときに入学した。秋と春は10キロの道を馬で通った。冬はアイマグセンターに家族で引越した。中学は2年間寮に入り、高校は知人宅に身を寄せた。小学校は1クラス20人だった。7学年を卒業すると、高校へ行くか、職業学校へ行くか子どもが好きなように決めた。職業につきたい子は職業学校へ行った。成績で決めたわけではない。私は中学まであまり優秀でなかった。5段階で4レベルだった。通学中馬上で詩をよく読んだ。高校でも全教科4だった。私はモンゴル語や文学が好きだったので、4年制師範大に入った。1953年までは緊急に教員を養成しないといけないので、2年制だったと思う。当時、希望者はほとんど大学に入れた。私は大学では「赤いDiploma」をもらった。

タテ文字には興味をもったが、大学1年生の半学期だけ習った。50年以降は学校ではタテ文字は教えていなかった。67年以降になり第5学年から習うようになった。文学は、世界文学で、ロシア・イギリス・アメリカ・ギリシャなどの古典を多く読んだ。プーシキンやシェイクスピアなどモンゴル語で読んだ。モンゴル語では語彙論、文法を中心に言語学、口伝文学も履修した。ロシア語は深くはしなかった。学生の中には成人労働者もいて、外国語は弱かった。

1964年に卒業し、5-10学年の中等学校の国語・文学の教員資格を取り、アイマグセンターに戻り、第1学校の教師になった。1998年に修士の資格をとり、コンサルタント教員になった。64年以降90年までの26年間、また90年以降現在まで14年間私は教師だった。この間教頭や校長、指導法研究室のリーダーなど歴任した。

60年までの共通教育は「初等教育」といい、4年生までだった。61年以降共通教育を「基礎教育」といって、65年までは第7学年まで、その後は第8学年までが基礎教育であった。80年以降になり、職業教育が10年制学校の中にも入ってくるようになり、第11学年で職業教育を習うことが特定のアイマグで試行された。60年代までの職業教育は夏休みに行われ、子どもキャンプ場で乳絞りと農牧業の実習をした。学校での教科書は今まで使っていた教科書の中から親と学校を選んだ。学校寮は、ネグデル(共同農業)が始まりそれが完成した50年

代後半に広まった。寮は無料で、60年までは親が燃料、肉を出していた。90年までは今のよ
うな統一試験はなかった。小学校はソムで、中学はアイマグで、高校は国が統一テストをした。
90年以降は小・中・高すべて国が統一してやるようになった。

90年以降の学校はいったい何のための学校なのか。市場経済のニーズに合わせた学校とは
到底いえない。市場経済の中で社会主義の学校がそのまま残り、そのままやっているように思
える。学校はカリキュラムを作る権限を持たない。教科別の授業時間数や単元別の授業時間数
を学校が決めることもできない。ナショナルスタンダードを100%実施するだけだ。それは市
場経済のニーズにあった学校などではない。

教育環境は悪化した。指導法の改革やIT教育は少しずつ進んでいるが、教育システムは変
わっていない。アカデミックな教育をプラクティカルな教育にするというのは正しいが、教育
レベルを落としてはいけない。

90年以降で苦勞していることはいくつかある。第1は、子どもが教育に熱心でなくなった。
本を読まなくなった。第2は、教員の社会保障の悪化で、教員は授業をしながら、商売もする。
これでは子どもは教師を尊敬しない。第3は、ジェンダー問題で、大学生や教員は女性が圧倒
的に多い。男性の大学生や教員が少なすぎる。第4は、教員の再訓練がないことだ。

私は「功勞教員」のメダルを大統領よりもらった。これは教育界最高の栄誉で、現役では県
内に2人くらい、全国では200人くらいしかいない。受賞理由はわからないが、モンゴル文字
の新しい指導法を開発した、行政職員（校長・教頭）を40年近くしてきた、多くの子どもを
育て、学校改革にも影響を与え、10年制学校を多く作り、競争を導入した。こんなことが受
賞に関係していると思う。40年間の勤務は長かったし、私の学校（第1学校）には優秀な教
員が集まってきた。そうしたおかげで受賞したのだと思う。

（小出コメント）

チュルンバルとのヒアリングのきっかけを作ってくれたのは、スフバートル県の指導主事を
やり、現在第1学校の校長をしているバイガルマーだ。彼女は2003年3月にJICAの国別特設
研修（「教育行政」をテーマにした10数人のモンゴル関係者の日本派遣事業）で日本を1ヶ
月間訪問した。優秀な女性教師で、この日本派遣後の帰国研修では質の高い教員研修会を何回
も開いた。私もウランバートルやスフバートルで何回か彼女に会った。05年3月7日に彼女
が私の事務所にやってきたとき、私の頭の中にはモンゴル教育行政関係の要人に対するヒアリ
ングの企画があったので、彼女にスフバートル県にいる人から聞き取りの候補者をあげてもら
った。彼女は即座にチュルンバルの名前をあげた。彼女のもっとも尊敬する教師がチュルンバ
ルだった。

ヒアリングからはチュルンバルがバイガルマーのもっとも尊敬する教師だとする理由は明確
にならなかった。しかし、1960年代に大学を卒業し、それから50年近く学校現場で教員をや
り続けた人の“思い”を知ることができた。特に1990年という年とその後の10数年が現場教
師にとってどのような意味があったのかを垣間見ることができた。

社会主義時代の学校が改革されないまま90年以降も残っている、学校は市場経済社会への
移行に適応していない、という彼の指摘は鋭く、有力な仮説になる視点だ。1990年以降チュ
ルンバルは新しい社会と学校になにかを期待したはずだ。しかし学校は期待に反してよくな
らない。新しい明確な教育目標は示されない。学校管理のシステムも旧態依然として自立した新

しい学校が生まれたわけではない。教育内容の国家基準について言えば、その名称が以前の“プログラム”から“ナショナルスタンダード”に変わっただけで、トップダウンの形態はそのまま残っている。教育環境はむしろ悪化した。その上子ども達は学習意欲を失い、社会一般も教育に熱心でなくなった。教員の待遇は最悪で、研修を受ける機会もない。教員に対する社会的評価は地に落ちた。以上が教育世界で最高の荣誉である大統領“功労教員賞”を受けたベテラン教師の現状認識だった。政治と行政のトップにある者と学校にその一生をささげてきた者との間のこの落差をどう見たらいいのだろうか。彼はなぜ“功労教員賞”を受けたのであろうか。チュルンバルはこの授賞理由については多くを語らなかつた。彼はモンゴル文字の指導法を開発してきたことで有名だった。モンゴルでは1950年代よりモンゴル文字の教育は禁止され、文字表現はキリル文字に変えさせられた。90年以降モンゴル文字の教育は復活するがその実現は遅々として進まない。そんな中でチュルンバルはモンゴル文字の指導に熱心だった。彼はそれによりモンゴル文化の伝統を伝えたかっただと思う。しかしその情熱を聞き出す時間はなかつた。彼があげたそのほかの授賞理由は平凡なものである。1960年代以来一貫してこの県の学校指導の中核にいた人への報いの証しであった。

37 U. デルゲル (Unur DELGER, ダルハン第19学校校長, 私立学校, 男性)

私は1941年にバヤンウルギーのサクサイ・ソムに生まれた。アイマグセンターから30キロほど離れた川沿いの景色のきれいなソムだ。ウリアンハイ部族の出身だ。この地方はカザフ族が多い土地だが、私はモンゴル系の部族だった。国立大の化学のオユンツェツェグさん(証言20)も同じ出身だ。兄弟10人で、父はバグ長で、祖父は馬を1000頭ほど飼い、競争馬を育てていた。他に羊を1500頭ほど飼っていた。祖父は、そのほかに小さい企業を経営していた。遊牧に必要な鞍とか、鐙、靴などを売り、代金は家畜でもらっていた。こうした技術はロシアや中国から習った。

サクサイソムはモンゴル西部の文化センターだった。1000人以上の僧侶がいる大きなお寺もあった。モンゴルが清に支配されていたとき、モンゴル西部地区は清と戦い、独立し、チベットと交流した。1900年頃東部ではハルハ族が清と戦っていたのと同様に、西部ではわれわれの祖先が清と戦った。私の母は仏教系の知識人だ。西部モンゴルにはチョグトノロブサンという活仏がいた。母の父はこの活仏と親戚だった。母の父は薬草を使った医者だったが、1930年代の粛清で殺された。活仏も連れ去られた。また母の母の妹がニヤムジャブノツェベンという有名な女性の活仏だった。人間の過去・現在・未来を予想できる優れた僧だった。母の友人には他にもヌムンという有名なシャーマンがいて、目は見えないが天気予想などに優れていた。母の父はトヴァ族で、ウリアンハイ族やトヴァ族にはシャーマニズムの信者が多かった。

私の父及び祖父は馬を多く持っていて豊かだった。社会主義時代には金持ちがねらわれたが、私の家は馬をもっており、これを軍馬として白軍や赤軍に寄付していたので、40年代までは持ちこたえた。200頭寄付したという証明書なども残っている。しかし40年代に入り、チョイバルサンが首相になり、チョイバルサン・プランといって持てるものから財産を取り上げ配分し始めた。私の家は馬による郵便の宿場のような仕事もしていたので50年代前半は乗り越えたが、ネグデルが始まってからは羊・馬など700頭は取り上げられた。私の父は私が5歳の頃肝臓病で死んだ。祖父は80歳まで生きたが50年代の後半ネグデルの始まる直前に死んだ。

私は1951年10歳のときに小学校に入学した。サクサイ・ソムに初めて作られた学校の第1

期生だった。35人の生徒がいた。国語と算数しか授業はなかった。教師は男の教師で師範学校を卒業したばかりの若い教師だった。いい教師で、授業で疲れたことはなかった。教科書はなく、休み時間にはよく川に遊びに行った。当時は小学校4年、中学3年の7年制基礎学校だった。小学校を終え、アイマグセンターの中学に入った。いろいろな教科があり、教科書もはじめて見た。寮に入った。第6学年の時1年間カザフ族のソムの学校に移った。半年後にはカザフ語が分かるようになった。1年後再びソムの中学に戻ったが、成績は悪化していた。国語や数学は落第点だった。ちょうどその頃ウランバートルより男の子が移ってきて私の隣に座った。家も隣同士だった。彼は成績が良く、私は彼に教わりながら5・6年の教科書をやり直した。これで成績が上がり、第3・4学期の頃数学では優等生になった。

1960年に高校を卒業した。教員になりたかったので、ウランバートルの国立教育大の物理・数学科に推薦で入った。64年の卒業時には指導教員からモスクワ大に行けといわれその予定でいたが、教育省の役人の子がこのポストを使ってしまったので私はいけなかった。そしてバヤンウルギーに戻り、私が卒業した第2学校の教員になった。ここで2年間教師をした。

私はいい教師になりたいと思っていた。私は数学を知っていて、楽しいのに、それを子供にどう教えたらいいかわからなかった。また当時の生徒で小学校のときは算数ができるのに中学に入ると駄目になる生徒が多かった。算数(Arithmetic)の世界は抽象的な世界でこれを子供にどう教えたらいいか、という問題だった。ドイツのガウスはArithmeticは数の原則だと言った。それはそうだが、方程式などを解く方法を開発し、子供に適用してみた。子供の成績は上がり、その結果教頭にさせられた。

私が数学の指導法に関心を持ったのは、教育大でドヨド教授(証言8)に教えられたことが大きかった。私は、自分はドヨド教授の弟子だと思っている。彼は私に学習指導の楽しさを教えてくれた。彼は科学の世界の理論を子供にどうやって教え、理解させたらいいかを考えた人で、私にとっては一番えらい人だ。彼は本当の教育者だと思う。

ウルギーで2年間教えているうちに、私の妻も数学教師だったが、彼女がダルハンに派遣された。それで私も1966年にダルハンに移った。ダルハンでは18年間数学の教師をやり、その後は教頭・校長をした。80年代は管理職として学校をどう開発・発展させるかを考えた。指導法の開発、普及だけでなく、教員の社会保障にも取り組んだ。

90年に第7学校の校長をしているときベレストロイカがはじまった。ダルハンにいたロシア軍はほとんど引き上げ、モンゴル軍が残った。モンゴル軍の中には私の教え子もいて、偶然彼と会ったときに、彼は「先生市場経済社会になったのだから自分の財産を作ったらどうですか」といってロシアン・ジープをもらった。新しいディーゼル発電機ももらった。発電機はバヤンホンゴルのネグデルに8万Tgで売った。その金で羊300頭、牛5頭、馬1頭を買い、第7学校に寄付した。学校は土地を持っていたし、畑もあった。私は何とか学校を豊かにしたかった。そうしないとあのひどいインフレの時代に教員の社会保障はできなかった。これらの学校財産からの生産物を教員に分けて生活の保障とした。

91年にベレストロイカの影響で校長選挙制度が導入された。私の学校でも校長を選挙で選ぶ動きが起り、3人立候補ないし推薦された。選挙の結果私が校長に選ばれた。ところが教育局の方からは、選挙ではわずかの違いだったからお前は校長をやめろ、といわれた。私は学校や教育のためにいろいろやってきたが、けっきょく公立学校にいたのでは自由な発想で教育をよくすることができないとわかった。それで私は学校を辞めて、自分で新しい学校を作る決

心をした。

偶然息子が知り合いのドイツ人が私立学校を作りたいといっており、このドイツ人を私に紹介した。ドイツ人は自分で英語を話せる人を探すから、私には学校を作ってくれ、という提案をしてきた。当時はまだ私立学校法はなく、私は直接アイマグへ学校設置を申請した。ロシアの幼稚園が使われずに残っていたのでそこを改造して学校にした。申請は市議会で審議されたが、ほとんどの議員が反対だった。“子供を実験に使うな”，“ドイツ人やアメリカ人がいなくなったらどうするのか”，“お金はあるのか”といった質問や意見だった。議長も“誰のためにこの学校を作るのか”，“英語やドイツ語を教える事など法律にはない”，“親のニーズに合うのか”と言って反対した。しかし最後にアイマグの知事が“この学校の提案はスタンダードに基づいている，ドイツ語・英語は将来必要になる，この人は何かを破ろうとしているのではない，つくろうとしているのだ”と言ってサポートしてくれた。こうしてモンゴルで第1番目の私立普通学校が認可された。1993年だった。

最初は4人の教師と60人の生徒で始めた。教師は私とドイツ人，アメリカ人，小学校の先生だった。私は無給で，小学校の先生についてはアイマグで出してくれた。廃屋の幼稚園は自分たちで直したが，私がかつて職業訓練センターの教師をやっていたことがあり，そのときの建築コースの卒業生が手伝って直してくれた。今は14年目で，教員60人，生徒666人になった。高校卒業生を4回出した。154人でそのうち80人以上が外国に行っている。日本へも10人行っている。英語やドイツ語を母国語のように使える事を目標の一つにしているので外国の大学への進学は困難ではない。外国人教師が10人前後いる。アメリカ，ドイツ，日本，スイスから来ている。今までに外国人教師は100人以上来た。そのうちのアメリカ人Dennis M. Wilhoitは，アメリカの英語のカリキュラム研究者の弟子で，ダルハンに2年間滞在し，1年間毎の英語のカリキュラムを作ってくれた。今年からこのカリキュラムで授業をしている。アメリカのカレッジの優秀生徒の名簿の中に2人本校の卒業生が乗っている（Honoring America's Outstanding College Students）。日本とは立命館大学のアジア太平洋大学と交流し，感謝状ももらった。

本校ではモンゴル語とモンゴル史の授業を特に重視し，きちんと教えている。これは何よりもモンゴルに貢献する次の世代を育てたいからだ。またモンゴル子供連盟という組織があり，毎年優秀高校生を表彰している。これは理数系，文化芸術系，国際交流系などの各分野で優れた活動をした高校生を表彰する制度で，本校からは馬頭琴や歌のうまい生徒が文化芸術系で2人，日本やドイツとの交流で優れた実績を持つ生徒が2人国際交流系で表彰された。とにかく生徒には自分の好きな分野で才能を伸ばす事を期待している。学校の一般方針としては「人間的で，人を尊敬し，自然を愛し，自分の個性をもつこと」を目標としているが，その点では授業外活動を重視している。たとえば数学が好きな生徒には数学研究者を紹介し，馬頭琴の好きな生徒には馬頭琴のプロを紹介し，チェスが好きな生徒は国際大会に出れるようにしている。子供の育ち方が大事で，これをサポートしないといけないが，これは大変難しいことでもある。自然との対話も重要だ。しかしそのために学校では特別にすることはない。しかし絶えずその重要性については生徒に話している。

モンゴルの教育改革は急ぎすぎだ。改革は大事だが，大事なのはそれを言う事ではなく，実現する事だ。そのためには十分時間が必要だ。90年以後のいいことは，努力すれば報われるということだ。そうした地道な努力が必要だ。

小出コメント

デルゲル校長とは初対面だった。ダルハン教育局長のアムガラン（証言 39）の紹介で会うことができた。私はダルハンにはナラン学校（証言 28）しか私学はないと思っていたがそれは思い込みで、ここにはモンゴルで最初にできた私立学校があった。その創設者がデルゲルだ。彼はモンゴル最西部のパヤンウルギー県出身で、ウリアンハイ族に属する。モンゴル人の主流のハルハ族とは違うが同じモンゴル人だ。

彼はモンゴル国立大学の数学科に入り、そこでドヨド教授に会い、数学教育の楽しさを知る。ここにもドヨド教授の弟子がいたことを私は発見した。デルゲルはダルハンで 1966 年から 90 年過ぎまで 18 年間数学の教師をやり、80 年代には校長として指導法の開発や教員の待遇改善に努力した。そしてベレストロイカの影響下で実現した校長選挙制度の導入により勤務校で校長に選出されるが、教育局からは別の人が任命された。この経験から彼は国立の学校教育に決別し、私立学校の創設を決意する。多くの反対に遭遇するが知事のサポートによりデルゲル校長はモンゴルで最初の私立普通学校の創設に成功した。

4 人の教師と 60 人の生徒で始めたこの学校は今では 60 人の教師と 600 人を越す生徒の学校にまで発展した。教員スタッフは国際的で、英語のカリキュラムはアメリカの専門家により作られた本格的なものだ。日本の立命館大学とも連携している。とはいえこの学校で最も重視している教科はモンゴル語とモンゴル史だ。モンゴルに貢献する次世代を育てることがこの学校の目的だからである。学校目標は「人間的で、人を尊敬し、自然を愛し、自分の個性を持つこと」となっている。ドヨド教授の夢がここでは現実のものとなっている。

デルゲル校長の私立学校は多くの点で公立学校とは異なる。公立学校に見られる学校空間の狭さを感じさせない。自由な空間がある。この傾向は私立学校にはほぼ共通して見られる。とはいえ多くの私立学校は大学など高等教育機関への厳しい進学競争にさらされている。こうした学力中心的な狭さはこの学校にはない。このヒアリングを通して得たこの学校の特徴を挙げるとすれば以下になる。第 1 に、学校の活動空間の持つ国際的な広がりである。創設して 10 年であるが、すでに 100 人の外国人教師を招聘している。アメリカ・ドイツ・日本など交流は広い。広いだけでなく、英語のカリキュラム・テキストの編集に見られるように専門家を呼んでの国際交流となっている。受験英語を目指した学習ではなく、国際世界で十分対応できる人間を育てている。第 2 に、ナショナルな伝統や文化を重視している。モンゴル語やモンゴル史に重点を置き、将来モンゴルに貢献できる若い世代を育てている。第 3 に、エリート育成の“教科オリンピック”への参加よりも、文化芸術系や国際系の生徒の日常活動を重視したコンクールへの参加を奨励している（“モンゴル子ども連盟”主催のコンクール）。第 4 に、学校の教育目標は明確・簡素で“人間的で、人を尊敬し、自然を愛し、自分の個性を持つこと”となっている。そのため学校では人・自然・文化・歴史などとの対話を中心にした“育ち”を重視している。ただしそうした活動空間が校内で保障されているわけではなく、このことの重要性が絶えず生徒に強調され、その実践は個々の生徒に託され、教師はその相談役になっている。

大体以上のような特徴を持つ学校経営をデルゲル校長は意図している。これは私立学校だから言えることで、彼は現在のモンゴルの教育改革を評して“急ぎすぎだ”と言う。“改革は大事だ”，しかし大事なのは“それを言うことではなく、実現することだ”，と彼は言う。“そのためには十分な時間が必要だ”。こうした発言は、自ら多くの教師や生徒と協力して学校を作り上げてきた実績があるから言えることだ。“モンゴルの教育改革は急ぎすぎだ”と言うデ

ルゲルの指摘には重さがある。

なおデルゲルの話すストーリーの中にはモンゴル西部地区の少数民族の歴史が彼の家族史を通して語られている。清からの独立を果たそうとした二世代上の祖先たちの働き、1930年代末にラマ教徒たちに加えられた粛清、40年代に入ってからチョイバルサンによる財産没収など、いずれもモンゴルの現代史の一コマを、彼は我々に語っている。

38 D. ツアガーン (Dugjuur TSAGAAN ダルハン県教育文化局生物・化学指導主事, 女性)

私は1962年12月12日にゴビアルタイ県トゥグルグ・ソムに生まれた。遊牧民の子で、乳搾り、カシミア梳きなど遊牧民の子がやることはすべてやった。ネグデルのメンバーだから私有の家畜は少なかった。馬・らくだ・羊・ヤギなどの面倒を見た。

1968年9月、6歳でソムの8年制学校に入った。中卒後はアイマグセンターの第1学校の高校部へ進学した。高校卒業時は200人中30位くらいだった。大学には定員制限があり、推薦枠に入れなかった。職業教育学校に入りカザフスタンの学校の試験を受けて留学した。農業コンビナートのトラック運転手の資格をとった。私は小さいときから農業に興味を持った。だから国立農牧業大学に行きたかったので受験した。しかし合格通知は私がカザフスタンに出た次の日に届いたので農大にはいけなかった。カザフスタンには1978-79年の1年間いた。ウルザイフカ農業職業学校だった。

79年の帰国後は東のはじめのドルノド県のハルハ川近くのスベルソムの農業ブリガードに派遣された(ノモンハンの近く)。配属は第3小麦ブリガードだった。当時スベルは発展途上で、発電所、10年制学校、牛乳ファーマー、食堂などがあり町を形成していた。私は夫や子供と一緒にいた。19歳で1番目の子供が生まれていた。ここには農業牧畜のあらゆるものがあった。農業研究センターもあった。蜂蜜なども有名だった。私のブリガードは100人くらいで、それが数クラスに分かれていた。1クラス2-30人だった。私はクラスでただ一人の女性だった。コックや洗濯や会計なども担当した。子供を妊娠しているときはソムのホテルに回され、食材関係の会計を扱った。給料はよかった。会計の基本給は600tgだったが、トラックで頑張ると手当が出て2000tgくらいまでなった。私はここで83年まで勤務した。

1983年にモンゴル国立大の化学・生物学部に送られた。ブリガードでいい成績を上げていたので大学へ推薦で派遣された。主人は農牧業大学へ進んだ。もちろん大学へ進学するためには人民革命党に申請書を前もって出さなければならない。私は黨員ではなかったが申請していた。真実を言うと革命党からいらまれたので、私は革命党が嫌いだった。私が黨員であつたらもっと優遇されていたと思う。

83年に大学に入り6年間勉強した。妊娠していたので1年長くかかった。生物コースを選び、実習や野外観察が多かった。研究テーマはタルバガン(モンゴル・マーモット)の頭の大きさによる種の違いを調べた。生態系の違いや地域の違いでどの様な影響が頭の違いに出るのか。従来はモンゴルのタルバガンは2-3種類だといわれていた。私の調査結果では種類は2種だが、それぞれの中に違った亜種がいた。西から東へ行くと小さくなったり、毛の色が変わる事もわかった。教師にほめられ研究者になれと言われてたが、教師になった。

当時就職先は自分で決められなかった。出身地へ帰ることが原則だった。だからウランバートルに住むことなどできなかった。必要と考えられた人だけが住めた。主人は大卒後ホブトの生物地域研究センターに勤務していた。私はホブト大学(国立大学分校)の教員になれた。し

かし私は発言が自由すぎると言われており、ホプト校には行かれなかった。私はクラスで1位だったので、イルクーツクへの派遣生にもなれた。担任からも行けると言われていた。ある日「あなたはどこへ行くのか」と聞かれ「イルクーツク」と言ったら、「そんなことはない、誰にそう言われたのか、イルクーツクへ行く人は決まっている」と言われ、結局行けなかった。当時あった環境省からも来いと言われた。これは主人が反対した。結局主人の弟や親戚がいたダルハンに行く事にした。1989年だった。

89年にダルハンに行ったが仕事はなかった。教育局に勤めていた人がダルハンの小学校の教師になれと言ってくれた。当時は具体的な勤務場所は県の機関が決めた。私は中等学校の化学・生物教師になりたかった。しかし中等学校教師も教育大卒業者が優先されていて、私はなれなかった。そんなわけで小学校教師になった。ところがその校長が今の教育局長のアマラン（証言39）で、この校長が私をこの学校の中等学校の生物教師にしてくれた。こうして私は89-91年の間第1学校に勤務した。91-93年は第18学校に勤めた。

その後は主として教育局勤務となった。93年に教育文化局の化学・生物指導主事になり、93-96年は教育文化センターの副センター長をやり、96-01年はセンター長、01-04年はノンフォーマル担当指導主事、04-05年はソーシャルワーカー担当指導主事、そして05年以降生物担当指導主事をしている。

89年から始まったパレストロイカに私は大賛成だった。当時私はまだウランバートルの大学生だった。校内には看板が出され、報告会が開かれた。この当時から私は賛成だった。それは社会のニーズに合っていた。私達夫婦は別れ別れだった。これに不満を持っていた。それ以外にも具体的な理由はあった。社会主義時代は強制的だった。行政職員（管理職）には裏があった。本当のことを言わない。オープンではなかった。密告の世界があった。印象が悪かった。教員になってからも大変だった。放課後の指導などが終わってから毎晩会議だった。それも意味のない話が多かった。参加しないと給料を引かれた。管理職は「私は革命党の代表だ」と言わんばかりで、強制的な態度をとった。特権的な優遇措置が党员にはとられ、賄賂も横行した。私はこういうことに反対だった。当時の私の学校の教頭は優秀だったが、教頭の言う事を聞かないと駄目だった。何事も「はい」といわないといけなかった。私は民主的な社会にしないといけないと思った。

90年以降になり学校は変わった。「教育は大事ではない」「教育はいらない」と親も子供も言うようになった。商売が優先した。こうした状態は2年間続いた。その後やっと「教育は大事だ」と言われるようになった。教育省の政策も駄目だった。生活が大変で幼稚園に行く子がいなくなった。それで幼稚園を民営化してしまった。就職場所がなくなると職業学校を民営化し施設設備を売ってしまった。

とはいえ自由に研究ができるようになったし、指導法の研究者も増えた。県教育局も研究センターになった。指導主事も増えた。96年頃から教育改革が始められた。意識改革も始まり、法律改革も進み始めた。2000年には政権が革命党に変わったが、革命党は社会主義ではなく民主主義を求めるようになった。これはよかった。

学校の管理職の改革が一番遅れている。特に校長は良くない。お金をもらったり、人事を気ままにしている。学校予算を勝手に分ける。校長の条件・資格が法律できめられていない。教員の条件・資格は法律で決まっている。しかし校長は違う。これがまずい。年輩の校長は「自分は革命党から信用されている」と思っている。逆にまた校長の身分は不安定だ。多くの校長

は学校のキャビネットさえきれいならいいと思っている。これに比べ現職教員の意識改革はできつつあるとあってよい。

小出コメント

ツアガーンの経歴は少々複雑だ。高校までの成績はそれほど良かったわけではない。高卒後彼女は、モンゴル農業大学の合格通知が遅れたため、カザフスタンの農業職業学校に入る。この「証言」への登場人物は殆ど大学へ進学している。中等教育機関と見られる職業高等教育機関に進学したケースは珍しい。彼女はここを出てモンゴル東部のノモンハンに近いスンベルソムの農業ブリガードで小麦作りにかかわる。彼女の証言からわかるように当時スンベルソムは活気にみなぎっていた。私はこの地を2004年の秋訪問したが、到着したのは夜の8時過ぎで、街中まっくらだった。近くのデーゼル発電所から送電されず、街灯や家の電灯はついていなかった。ようやく9時ころ送電されたが、それも12時過ぎに止まった。翌朝気がついたが、街中には成人男子が職のないままたむろしていた。ソムの学校長は、ここはモンゴル随一の貧困地帯だと言った。ツアガーンはここで4年間働き、勤務成績がよかったので83年にウランバートルのモンゴル国立大学に推薦入学する。入学には革命党の推薦が必要だったが、彼女は革命党に批判的だったことがわかる。

モンゴル国立大学の化学・生物学部を卒業し、彼女は、夫の勤務地のホブトの大学、あるいは成績が良かったのでイルクーツクの大学に勤務することが可能だったが、いずれも彼女の日常の言動が障害となり、実現しなかった。結局彼女は夫の親戚がいたダルハンで職を探し、小学校勤務を教育省より命ぜられた。彼女は中等学校の教員免許状しかもたなかったので、この人事もおかしいのであるが、就職先を自分で選ぶことができなかった当時としては受けざるを得なかった。移動の自由、言論の自由、就職の自由のなかった体制の中で、ツアガーンは相当の苦勞を重ねた。

ツアガーンにとり幸いだったのは、ダルハンの就職先の第1学校長がアムガラン（証言39）だったことである。アムガラン校長は彼女を小学校部の教員にではなく、中等学校部の生物教師に指名した。アムガランは改革が始まった90年にこの県の教育局長になり、93年にツアガーンを県教育局の化学・生物指導主事に抜擢する。支持政党ではアムガランは革命党であり、党派的にはツアガーンとは違うが、彼女の持つ力量を正当に評価したのであろう。96年総選挙で政権が民主連合に代わり、アムガランは局長を辞し現場にもどるが、ツアガーンはアムガランの後を受けて局長（教育文化センター長）を引き受ける。2000年の総選挙で再び革命党が政権を担当し、アムガランは教育文化局長に返り咲く。その後ツアガーンは教育局のノンフォーマル教育や学校ソーシャルワーカーの指導主事を歴任し、教科指導とは異なる指導分野で職責を果たすが、05年再び生物担当指導主事にもどった。

ツアガーンにとって90年評価（ペレストロイカ）は明快である。彼女は「大賛成だった」と言う。80年代より革命党に批判的だった彼女にすれば、この評価は当然である。革命党に対する彼女の批判は自らの職歴と重ね合わせた批判であるだけに具体的だ。80年代の学校や職場における政党支配の状況がよくわかる。

90年以前の旧体制に対するツアガーンの批判は強いが、90年以降の教育現実に対しても彼女は批判的だ。90年代前半は彼女から見ても教育は後退し、教育が重視されなかったことがわかる。彼女は96年になってやっと教育改革が始まった、と言う。意識改革も始まり、指導

法も重視されるようになったが、学校現場とくに校長の意識改革が遅れている、と彼女は指摘する。彼らはまだ古い体質を残しており、体裁にこだわることを彼女は批判する。彼女に取り教育改革は始まったばかりである。ツアガンも JICA の「国別特設研修」の参加者の一人であり、04 年ころ日本を 1 ヶ月ほど視察している。このほど県教育局に理科実験センターができたので、そこを拠点とした彼女の活動が期待される。

39 D. アムガラン (Demberel AMGALAN, ダルハン県教育文化局長, 大統領“功労教員賞”受賞者, 男性)

私は 1950 年ウランバートルに生まれた。兄弟 10 人の長男だった。1970 年ダルハンで高校を卒業し、75 年に教育大の数学科を卒業した。当時は中等学校教員の養成は 5 年だった。卒業してブルガン県で 1 年間教師をしたが、77 年にダルハンの私の母校第 1 学校に戻り、そこで 86 年まで数学の教師をした。ここには数学の特修コースがあり私が担当したが、全国数学オリンピックにダルハンから初めて参加し、毎年優勝者を出した。この学校で私は 3 回卒業生を出した。当時は革命党の県委員会が毎年学校調査をして、優秀教員や、“100 の質”を達成した生徒を表彰した。私は 36 歳の時この“スバル賞”を授与された。当時としては若い教員が表彰されたのははじめてだった。

1987 年に入るとペレストロイカの影響がダルハンにも及んできた。校長選挙制度の実現の動きが起きて、第 1 学校では私が選挙で選ばれた。37 歳だった。90 年までここの校長をした。学校の物的環境をよくしようと努力した。当時学校には 3・2 ヘクタールの土地があり、そこで野菜を作り、1000 頭の家畜を飼育した。自動車を買ってこれで収穫物を運んだ。学校企業が発達した学校で、木工工場もあった。寮の食事や教員の社会保障に利用した。こうした環境からビジネスマンも生まれ、二人の国会議員も出した。

90 年になると、ダルハン教育部の中に指導法担当部ができ、私はその部長に指名され、指導法キャビネットの長をした。96 年には教育部が教育研究指導センターに変わり、私はセンター長になった。この間市場経済への移行に伴い教育セクターは大きな問題や課題を抱え、いろいろな意味で経験者を必要としており、私が指名された。この頃オランダのダニーダが国際教育援助機関としては一番大切だった。その中に数学教育の改革ワーキンググループができて私もそのメンバーに入った。ダニーダは教員の再教育を重視し、私もセンター長として教員再訓練を課題としていたので、この援助は助かった。教材開発のための印刷機などをもらい、これで教材の普及ができた。94・5 年頃になると教育文化センターも漸く安定してきた。パソコンなども各部に 1 台ずつ入るようになった。教員の社会保障は大変だったが、局の人の頑張りでも何とか克服できた。

96 年には総選挙があり、革命党から民主連合に政権が交代し、県知事も変わり、私はセンター長をやめ、第 7 学校の校長になった。この学校は荒れた学校で、長い間校長もいなかった。暖房もひどく、校舎の中は真っ暗な学校だった。ここにはいろいろな階層の子供が来ていたし、成績も悪かった。ここで私はまず教師の結集を図った。一人の努力だけでは無理で、教員の協力が必要だった。短期間にいい学校にするには何からはじめるか考えた。教員には給料も出ない、学校にはお金もない。まず暖房からはじめた。当時教員の給料は 5 万 T g だったが、12 万 T g 出して毛皮工場から暖房工を学校に招き、1 ヶ月で学校の暖房を修理し、学校を暖かくすることができた。私はこのことを通じて、市場経済では優秀な人が働けば働くほどサポート

されるし、生活もよくなる、ということを経験した。社会主義時代は本人の働きに関係なく待遇された。市場経済はそれとは違う事を教員に知ってほしかった。

第7学校の教員は酒は飲むし、授業活動をサボタージュしていた。何日間も徹夜で議論した。教師を集める方法を考え、学校の将来計画を作り、その実現の条件を作れば学校をよくすることは可能だと考えた。実現可能な計画を作ることが大事だった。年輩の教師は若い教員や女性教員が遅くまで議論するのはかわいそうだから早く帰らせようと主張したが私は譲らなかった。みんなが参加し、皆で考える事が大事だと考えた。また教員の環境をよくして、教員のサポート体制や評価制度を充実し、そのことが結果的に子どもをよくすることにつながった。入学する生徒も倍に増えた。こうして2年後に第7学校はダルハンの優秀校になった。

私は3年間校長をやったが、人を指導するときは、待遇で差をつけるのではなく、心からがんばらせないとだめで、みなで協力支援する体制を作ることが大事だと学んだ。人は上から言われたことをやるだけではなく、自らやるのが大事で、自主的自立的に動けるという雰囲気を作ることが必要で、私はこうした学校をつくった。よき学校経営のためには校長、教頭の権利が重要で、これを法律上キチンと定めることが必要だ。私の学校の教頭のひとりはこの学校経営で大統領功労賞をもらうことが出来た。

2000年の総選挙で再び革命党の政権ができ、私はアイマグの教育文化局長になった。私の学校の教師達は私が校長を辞して局長になることに反対したため、知事は1年間だけ私を第7学校の校長と県教育局長の二つのポストに併任させた。私は校長として第7学校と第17学校と統合し、総合学校をつくり、1年後教育局長に専念した。

局長になり重視したことは、どんな学校でも自らの戦略を持つこと、親の意見や経営者の意見を聞くこと、の2点であった。そして2002年にダルハン・オール県の戦略計画（02-05年）を作り、知事の認可をとり、120万Tgの財源を確保した。この間ICTを活用した教育改革を進め、教育局の中にTVスタジオをつくった。これを地域TV網と接続し、どこの学校や家庭であってもTVのチャンネルを開き、その中にある教育実践プログラムから好きなものを選び出し見ることができるようになった。TV局では二人の専任の技術者を採用し、彼らが学校に出向き、いい教育実践を収録、編集し、それをTVプログラムの中に入れ、いつでもどこでも教員・生徒・親はそれを見ることができるようになった。これにより県内の教師たちは自分たちの実践をTVを通して交流できるようになった。東京の飛鳥サイエンスクラブの理科実験授業プログラムもこの中に入っている。また親も自分の子どもの学校の教育実践を家にいながら見ることができるようになったので学校への関心が高まり、協力体制も出来てきている。この新しいプログラムはモンゴルでも初めてで、多くの人から注目されている。教育改革を地域で推進していくためにはほんとにいい企画だったと思っている。

教育改革の推進という点では、県内だけでなく、周辺8県との経験情報交流をやり始めた。来年はエルデネットでこの交流を実施する。学校2部制（午前・午後クラスの2部授業）が障害で新しい学校改革ができないという意見が一部の校長や教頭の中から出ているが、私たちは週1回の教員再教育の時間をとっており、この時間を利用して学校内の研究会や討論会を持つようにしており、2部制が障害となって学校改革が進まないというのはおかしいと思う。自分たちのことは自分達で解決する姿勢が大事だと思う。

（小出コメント）

アムガランは2006年に大統領の“功勞教員賞”を受賞した。この賞はモンゴル教育界では最高の賞である。正確な数字はわからないが1年に数人しか受賞していない。現役の県教育局長の中の受賞者はアムガラン一人である。私は彼にはすでに数回あったが、今回は彼の経歴を中心に聞き、授賞の背景となる彼の実績を知りたかった。

アムガランは1976年から86年までダルハンの学校で数学の教師をやり、彼の指導で全国数学オリンピックに生徒が始めて参加し、優勝者を出した。87年にはモンゴル教育界のペレストロイカのはしりだと思われるが、校長選挙制度が導入され、彼は勤務校で校長に選出された。37歳の若さだった。校長に選ばれてから彼は学校農場の改善に努め、1000頭の家畜を飼い野菜を栽培し、その売り上げで教員の待遇改善を図った。学校にはほかにも木工工場があった。社会主義時代における最後の山場だった。

90年になり地方教育行政分野でも改革が始まり、県教育局に指導法部局が設置された。アムガランは校長から教育局に入り、指導法改善キャビネットの部長となり、オランダの国際教育援助機関のダニダと協力して、指導法の改革に努めた。94・5年になり混乱していた地方教育界も「漸く安定してきた」と彼は言う。このヒアリングではこうした感想を持つ証人がほかにも多いので、95年前後が90年以降の教育改革のひとつのエポックであったといっておよそそうだと。

96年の総選挙で革命党から民主連合へと政権が代わり、革命党の支持者のアムガランは県教育局から去り、ダルハン第7学校の校長に移った。ここはダルハンでもっとも荒れた学校で、教員の質も悪かった。しかし彼は2年間かけて、この学校の再建に成功する。彼がもっとも重視したのは、全員協力体制の実現と学校の将来計画の策定であった。彼は「みんなが参加し、皆で考えることが大事だ」と言う。これは90年以前にはなかったことだ。同時に彼は計画の策定を重視する。国や県の政策とは別に自分の学校の政策を持ちそれを実現することが目指された。これも90年以前はもちろん、最近のモンゴルにあってもそれほど多いわけではない。ここでの経験がアムガランを大きく成長させた。

2000年の総選挙で革命党は再び政権の座についた。アムガランは県教育文化局の局長に任命された。彼は02年に5年間にわたる県の教育戦略計画を立て、知事の認可をとり、財源を確保した。また各学校が自らの戦略を持つことを重視した。そのため親や地域社会関係者の意見を重視するよう呼びかけた。同時に各学校の実践交流に努め、地域教育TVネットワークを作った。これはモンゴルではじめての試みであり、改革の芽を自分達の地域に求める体制ができた。その結果学校だけでなく各家庭においても県内各学校の教育実践を見ることが可能になり、親の学校への関心は高まった。さらに周辺8県との経験交流のネットワークを作り教育改革を推進する条件を拡大した。アムガランのこうした実践の中には、モンゴルの教育改革を推進できる地域的条件の創出が現実的になってきていることを読み取ることができる。

40 T. クシャイ (Tertigbai KHUSHAI 前バヤンウルギー県教育文化局長, 男性)

私は1955年、バヤンウルギー県西部のツエンゲル・ソムで生まれた。カザフ族の出身だ。モンゴルで一番西のはじめのソムで、景色のいいところだ。ロシアと中国の国境地帯だ。私は遊牧民の子どもで、55年までは羊やヤギが200頭くらいいた。ネグデルの時代になり75頭に減った。兄弟は、男5人、女2人の7人で、私は長男だった。8歳でソムの8年制学校に入学し、71年に中学を卒業した。高校はアイマグセンターの第2学校に入り、そこを73年に卒業し、

モンゴル国立大学の数学科に入った。親戚中では私をはじめ高等教育機関に入った。ウランバートルから試験委員が5-6人やってきて、500人が受験し、国立大学に40人くらいが選ばれた。数学科は3人だった。カザフ族だからといって差別されることはなかった。私は、ほんとうは自動車修理工になりたかった。教員になるつもりはなかった。試験委員からは「好きなところを選べ」といわれて「通信」と応えた。しかし県の教育局長からは「お前は数学を選べ」と言われ、面接委員は「強制するな」と言ったが、結局私は局長に言われたとおり数学を選ぶことになった。

モンゴル国立大の数学科には38人入学したが、卒業できたのは18人だけだった。特に第3学年までは厳しく、落ちた人は別のコースへ移っていった。教員にはドルジ教授(証言16)をはじめ、ミヤグダル、ミケイ、ダッシュドルジ(国際数学オリンピック)のほか、私より2年前の卒業で教員になったばかりのゴンチグドルジもいた。当時は本格的な社会主義の建設期だった。私は78年に卒業した。私はバヤンウルギーへもどり教員になることを希望したが、大学からは統計局に就職するか大学に残ることを求められた。しかし私はウルギーにもどった。

ウルギーにもどり、私は第1学校の中学校教員になり、そこで1年間勤めた。私は故郷のツエンゲル・ソムの8年制学校への転任希望を出した。しかし第1学校の教員には反対され、革命党からは行かせたくないという意見が出された。当時ソムで働く教員は少なく、人材不足だった。結局私の希望は受け入れられ、4年間そこで勤務した。そしてアイマグの革命党委員会教育文化部によって呼び戻された。私はこの年の春に革命党の準党員になっていた。当時ソムでは党員になれた人は少なかった。農民や労働者には党員はいたが、知識人の中には特に少なかった。私は親戚の中で最初の“知識人階級”に属した人間だった。その後私の弟も大学を卒業し“知識人”の仲間に入った。

アイマグセンターに戻って私はノゴンノールかサクサイの教頭になることを求められた。ノゴンノールはセンターより100キロ北にあった。穀類や飼料、乾草などの工場がある産業地帯として有名で、10年制学校ができたばかりだった。サクサイはセンターから近い農業地帯で、山と川に囲まれた風光明媚な美しい所だ。私はノゴンノールを選んだ。学校には二人の教頭が置かれた。教務担当と子どもの育成担当の教頭で、私は教務担当だった。学校はアチトノール(湖のそばの意)にあった。ロシアとの国境に近く、87年ごろにはロシアのペレストロイカの影響が及んできた。

87年にアイマグより校長を選挙で選んだらどうかという話があった。そこで校長を選挙で選ぶことになったが、アイマグの教育局からは校長候補が送られてきた。選挙結果では私が98%を得票し、校長に選ばれた。県から送られてきた候補者に対しては教頭になったらどうかと学校側で要請したが、結局県に戻されほかのソムの校長になった。これはバヤンウルギーではじめての校長選挙制度の導入だった。革命党でも選挙制を考えていた。しかし革命党は党から候補者を送れば当然その候補者が選ばれると考えた。よもや対立候補が出てその人が当選するとは考えなかった。私の学校の選挙結果に党はびっくりした。党とは逆に教員達は民主化に賛成した。党に反対するには勇気を必要としたが、この結果は教員が民主化に賛成していた証しとなった。私は32歳で校長に選出された。当時としてはもっとも若い校長だった。

1990年モンゴルは市場経済社会へと移った。バヤンウルギーでも民主化の動きが出てきた。役所のトップレベルの人たちも首になった。学校ではアイマグセンターの第4学校の動きが民主化の中心となった。第4学校の教員は、それまでの強権的な校長を首にしろとてデモを

した。また4人の教頭をも首にしろと主張した。教育局は第4学校の動きを止めようとした。しかし教員達はハンストを行い、反対運動を強めた。教育局では学校の教員の意見を聞かないといけないと判断し、やっと校長を変えることに同意した。第4学校の教員はカザフの教員が多く、反対運動の中心にこれらカザフの教員や美術の教員がいた。こうして第4学校の校長は選挙で選ばれることになり、候補者の推薦が始まった。

当時私はまだノゴノールにいた。ある日私に電話がかかってきて、「お前が第4学校の校長に推薦されている。学校計画案を作り発表せよ」と言われた。私は驚いたが、学校計画案を作って、第4学校に送り発表された。こんなことはいままでにはなかった。校長には4人推薦されたが、一人は選挙前に辞退し3人の候補者によって「計画案に基づく校長選挙」が実施された。そのうちの一人は教育文化局の専門官で、一人は第4学校の教員だった。選挙では私が92%を得票し、校長に選ばれた。こうして私は90年に第4学校の校長になった。同時に直ちに教頭を任命せよといわれた。私は学校の状況を知ってから任命したいと言ったが、すぐ任命せよということになった。私は教員会議を開き、会議の議論で二人を推薦してもらい、この二人について教員が選挙することにした。この方式が認められて教頭が選ばれた。

私の責任は重かった。90年からはじまる民主化と混乱の時代を乗り越えなければならなかった。何よりも教員の生活保障と安定した学校づくりが求められた。食料不足、インフレ、給与の遅配などに対処しなければならなかった。私はウルギーから肉・毛皮を調達しウランバートルに持って行って売った。その金で穀類を買いウルギーにもって帰った。春に家畜の子どもを買って放牧し、秋にそれを肉と毛皮に変えた。学校でトラックを買い、それでウランバートルに運んだ。このためには勇気を必要とした。失敗は許されなかった。ほかの学校では教員が辞めていった。第4学校の教員は残った。ソムには村のカンパニーがあった。そこで家畜を飼い、畑では野菜を作った。保管倉庫がありそこに貯蔵できた。学校でも保存庫を作った。秋に安い野菜を買いこみ、春には高い値段で売れた。こうした学校の事業で教員の生活を保障した。アイマグではいい学校となり、次世代を育てた。教師達は「助かった」と言ってくれた。村のカンパニーは96年までであった。

ところが96年に総選挙があり、革命党政権が民主連合政権に交代した。アイマグでも知事や教育局長は代わり、私は97年に第4学校長を辞職した。それまでの校長の多くは力があつたが、政権交代で退けられた。“クシャイだけは残そう”という動きがあつたが私は自ら辞めた。新しい民主党知事は学校財産を認めず、アイマグのカンパニーに統合してしまった。私はこれに批判的で、それもあって校長を辞めた。新しいソム企業は結局失敗し、2年後に解散した。学校財産の廃止と同時に、学校には独自の金がなくなった。校長は紙1枚自由に買うことは出来なくなった。ただ教員に給与を配るだけの存在になった。教育の質も落ちた。それまでの優秀な校長はいままであつた権限も認められず、くびになる前に自ら辞めたものが多かつた。私は、辞職後2000年まで個人で商売をした。タルバガンの毛皮で帽子を作り、カザフスタンにもって行き売った。この個人営業には親戚のものを職員として雇つた。

2000年に再び総選挙があり、こんどは革命党が政権をついた。新知事は私に協力を求めてきた。知事部局に教育文化政策部を設置し、その部長に指名された。アイマグにはこの部のほかに独自に教育文化センターがあり、これは中央の教育省の影響が強かつた。2003年にこの二つを合体し、教育文化局となり、私はその局長になった。

2004年までは教育省はアイマグの知事と協力して教育政策を進めた。したがって知事は教

育に対しても影響を及ぼすことが出来た。しかし、2003年の新予算法が契機となって中央省庁が直接アイマグの関連局と結合して政策を進めるようになり、知事は浮いてしまった。教育の分野も同じで、教育省は県の教育文化局に直接命令を出し、知事は教育との関連を遮断された。

こういうことがあって、バヤンウルギーでは知事が知事部局に社会開発政策部を作り、ここで教育政策と関連ある施策を開発してきた。私は03年に教育文化局長になったが、04年10月に局長を辞めさせられ、一時副局長を担当した。しかしその後05年6月に知事部局に移り、社会開発政策部調整局長になって保健、経済、教育に関連する施策の調整に当たってきたが、教育文化局とはなかなかうまくいかない。今でも知事と教育文化局長とは意見が食い違う。知事が代表する地方の意見がなかなか教育に反映しない構造ができあがってしまった。私は05年に県の教育政策を作って教育省に出したが、そこで止まったままになっている。教育文化局に教員再教育センターを設置し、それを自立性の高いものにしようと考えたが、当の教育文化局は反対する。政治の影響で教育が左右される事態となっている。

また県役所には92年までカザフ教育研究部というのがあった。ここでカザフ族に関連する教育プログラムを作ってきた。しかし92年に廃止された。カザフの文化や教育の重要性を大統領や首相に訴えてきたが対応は遅い。そういうわけでカザフ文化・教育を回復することは困難になっている。この面でもバヤンウルギーの独自の政策を作りたいが、出来ない。

こうしたこともあって私は自分の考えで生きたかった。そこで昨年9月に私立学校を作り、第1-5学年の生徒を募集し、学校づくりを始めた。中学レベルまでの学校にしようと考えたが、地元から高校まで作ってくれというので、10年制の学校にして、現在生徒は240人いる。数学、IT、英語の特修学校にした。設置者は私で、校長はハンオール大を卒業した娘がしている(IT専門)。私はいままでも数学オリンピックに参加する生徒を学校外で指導してきた。これからはこの学校で育てることが出来る。昨年アイマグの数学オリンピックに参加した生徒は500人いたが、私の学校から参加した生徒と教員が優勝した。これからは数学で落ちこぼれている生徒の成績を上げる教育実践を重視してやっていきたい。また理科教育も重視したい。こうした分野での国際交流を盛んにしたいと考えている。

(小出コメント)

クシャイは、私が2003年モンゴルへ着任した直後からの知り合いだ。彼はバヤンウルギー県の教育局長で、この県に多いカザフ族の出身だ。カザフ族はロシア系の種族だと言われており、彼はモンゴル人とは違ったヨーロッパ風の顔立ちである。この県では小学校はカザフ語の学校とモンゴル語の学校とに分かれ、カザフ語の学校のカリキュラムや教科書はこの県が独自に作る。この点でクシャイは苦勞した。また高校卒業生は隣国のカザフスタンに行くものとウランバートルに出てくるものとに分かれる。県の国境はロシアと中国につながり、両国との交流は盛んである。こうした錯綜した条件の中で次世代の子どもを育てなければならず、その意味でもこの県の教育局長の仕事は重い。

彼は1978年にモンゴル国立大学の数学科を卒業した。大学に残ることを勧められたが、ウルギーに帰り、出身ソムの8年制学校への就職を希望した。ソムの教育開発の重要性を知っていたからである。90年まで彼はソムの8年制、10年制の学校を歴任し、教頭なども経験する。87年には彼の勤務校で校長選挙制が教育局の指導で導入され、クシャイが選ばれた。32歳の

ときであり、おそらくモンゴルでは最も若い校長の誕生であった。ウルギーはロシアに近く、ペレストロイカの影響がモンゴル中央部や東部に比べ早く現れたのであろう。アムガランの証言（証言39）にあるようにロシアの隣接地ダルハンでも同じであった。

90年になりモンゴルでのペレストロイカが盛んになる。運動の中心は県都の第4学校で、教育局の反対にもかかわらず校長・教頭の排斥運動がおこり、成就する。ついで校長を選挙する段階になり、この学校の教員は別の学校の校長であったクシャイを選出した。彼はここで初めてソムから県都の学校へ移った。彼に対する県下の教員の期待が厚かったといえよう。90年以降の深刻な混乱期にあって、彼が第4学校の校長としてなした仕事は想像を絶する。行政機関の機能が麻痺したこの時期にモンゴルの教育を支えた力がどんなものであるかをクシャイは示している。

96年の総選挙の結果革命党員であったクシャイは他の革命党の党員校長と同様に校長を辞職し、学校を去った。ここにも公務員の政治的中立原理が確立されていないモンゴルの問題点が露呈した。彼が言うように多くの優秀な教員・校長がこれを理由に辞めていった。

ついで2000年の総選挙により革命党が復権し、彼は知事部局の教育担当部長に復職し、03年に教育局長に任命されたが、04年にはこの職を解任された。その背景には、中央機関による地方教育行政の直接統制と、地方の知事部局による教育自治の要求との軋轢・対立があった。クシャイは知事の信任を得るも、中央の教育省とは理解しあえず、その犠牲となったともいえる。彼はこれを機として公立の教育界から去ることになった。

カザフ族として自負を持つクシャイの行政職としての努力は未完であったが、2005年彼は県都に10年制私立学校を作り、そこで娘と一緒に新たな道を歩み始めた。彼は、自らの考えて、自ら望む学校の建設に取り組み始めたのである。

41 中西令子（ウランバートル第54学校教員、日本語）

1979年8月、私は始めて9日間のモンゴル旅行をした。司馬遼太郎の「街道を行く」を読んで、モンゴルへ来たくなった。ペキンから列車でウランバートルに入った。バヤンゴルホテルに泊まった。ホテルには各階に見張りがいた。食事のときはレストランの隅で食べた。他の社会主義国の人が遊遊された。ツアーではガイドは私的なことは一切言わなかった。ゴビのツーリストキャンプ場では、自由時間があっても柵の外には出れなかった。鷲の谷へは見張りつきで行った。ガイドは1日の最後に公安局にゆき報告書を出していた。

ウランバートルはきれいな町だった。ごみはなく、スフバートル広場は花壇で飾られていた。ウランバートルは人口45万くらいで、人ごみはないし、クルマもなかった。町には看板もないし、夢のように美しかった。中央郵便局のカウンターは重厚感があり、職員は5-6人しかいなかった。

デパートの横の本屋で地図を買おうとしたら、だめだと言われた。ホテルでは5階の厨房の職員が私を陰に呼び出し、何かのメダルをくれた。私は代わりにハンカチをやったら喜んだ。そして身振りでもこのことを絶対に言うな、といった。当時はみやげ物と言ってもこの国には切手しかなかった。ホテルのドルショップにはカシミアのセーターが1枚と革靴が置かれていただけだ。食事は野菜がなく、肉だけだった。そのあとロシアに出て日本に帰った。ロシアには野菜があった。果物も市場でたくさん売っていた。食事もよかった。ロシア人はオープンだっ

たし、規制はなかった。どうしてこんなに違いが生まれたのであろうか。

92年に友人と3人で2回目のモンゴル訪問をした。ペキンから列車で入った。国境のエレン(二連)の駅舎のホールではダンスをやっていて、中に入れと言われた。ホームも自由に出入りできた。モンゴル人が中国に買出しに来ており、列車の指定席の車室まで人がどんどん入ってきて荷物をいれ、ごった返しだった。ウランバートル駅に着くと荷物で減茶苦茶で、買出しの荷物車でひしめき合い、駅前のごみだらけだった。ごみの中に人がいる状態だった。クルマは増えたが、ほとんどがロシア製だった。

ホテルは明るくなった感じだった。町の中や店には自由にはいれたが何もなかった。ホテルでの食事以外は外には食べるものがなかった。時折デパートに乳製品が入ると人の山になった。郵便局の中も人ごみで、ごったがえし。電池、ねじ、釘、糸などみんな街頭でばら売りしていた。“民主化はごみの中”といった感じだった。

93年に行ったときは8-10月の3ヶ月間パレスホテルに泊まった。1泊素泊まり400Tgで食事が500Tg取られた。店には品物が増え、パンも何種類か売っていたし、野菜も出始めていた。デパートの前には子連れの子じきが何組かいた。マンホールチルドレンはまだいなかったようだ。アパート代が1ヶ月2500Tgだときた。しかし外国人には貸さなかった。

94年8月にウランバートルに住むつもりでモンゴルへ来た。観光ビザから滞在ビザへの切り替えが出来るときたが、だめだと言われた。私は司馬遼太郎の『街道を行く』に登場するツエベクマさんを知っていたので、彼女に頼んだら中国に一度出て、そこで滞在ビザを取れ、と言われた。しかし面倒くさいので日本に帰り、95年3月に滞在ビザを取り、またもどった。今度はツエベクマさんのアパートの1室を借りた。このときはウランバートルの第54学校から日本語教師になってくれと頼まれた。

95年5-6月には教員ストライキが全国に広がった。スフバートル広場には毎日何千人もの教師が集まり、議事堂前で座り込みをした。教員の中には学校に来る人もいたが、彼らは何もなかった。校長もストに参加した。理由は教員の生活保障で、この当時教員給与はまともに出たことがない。地方では何ヶ月も遅れて支給された。給与は銀行から出たが、職員が銀行に行っても手ぶらで帰ってきた。銀行にも金はなかった。祭りがあると、とりあえず一時金が出た。それをもらってもいつの給与かわからない始末だった。同時に商品もなく、国立マーケットに行っても羊肉はなかった。チケットをもらっているのに売り切れで手に入らなかった。95年に私が郵便局に行き10人分の切手を請求したが9人分しかなかった。次の日に行ったら1通49Tgしていた切手が一挙に246Tgになっていた。70Tgのパンが翌日は110Tgになっていた。インフレが悪化し、給料が大幅に遅配した。これでは教師はストをやるしかなかった。多くの教員がやめ、韓国中国に出稼ぎに出た。こうして08年くらいまでは遅配が続いた。2000年になり定期的に支給され始め、04年からはきちんと出るようになった。

最近の教育状況について少し話したい。

現在の教員の基本給は5-6万Tgくらいだ(日本円で7000円くらい)。低学年教師で1ヶ月7万Tgくらいもらう。ノルマは1週19時間教えればいい。後は家に帰り個人教授やほかの学校で教えてもいい。私は週38時間持っている。19時間以上授業すると加配がある。生徒のノート検査で成績がいいと加配される。指導法がいいと校長に評価されると1万Tgくらい上がる。こうしたプラス分があるので、私の場合だと20万Tg(2万円)くらいになり、生活は出来る。

学校の経常経費は国からはまったくこない。したがって父母負担に頼らざるを得ない。私のクラス（日本語クラス）の子は1人当たり年に4万Tg負担する。ほかのクラスは3万Tgだ。外国語の授業を受ける生徒の負担が若干高い。これらは学校の収入になる。普通“授業料”と言っている。そのほかに自分のクラスの修繕費などが必要で、これは一人2250Tgとっている。それ以上とってはいけないことになっている。以前はこうした父母負担から教員給料を補充していたが、今は禁じられた。

生徒の成績評価はA-Fで表し、Fは不合格だ。Fを出すと担任の教師がやってきて、クラスの名誉にかかわるから出すな、という。Fを出さない教師は、質がいい教師だと言われる。一部の親はFを出す教師は悪い教師で、教師の責任問題になる。逆に生徒の実力がなくてもAを出す教師がいる。しかし上級学年になると生徒のほうがかこうした教師を見抜き、軽蔑する。

一般的にいうといい教師は少ない。私の学校でも私が尊敬する教師は二人しかいない。女教師が90%以上だ。今の校長が来る前には酒のにおいをさせて授業をやる女教師がいた。母が亡くなったといって香典を集めた教師がいたが、うそだった。母親が病気でお金があるから貸してくれと言うので15万Tg貸したら、これもうそだった。30歳の女教師だったが、彼女はクラスの金を使い込んでしまった。

生徒のほうも悪くなった。携帯電話を持つ生徒が増え、これを使ってカンニングをする。授業中にもかかってくる。中等クラスでは化粧が濃くなり、タバコが増えた。中学でもすいながら登校する。中学の卒業式にバス旅行をするが、生徒一人が1本づつアルヒ（モンゴルウオッカ）を持ち込み問題となった。それ以降バス旅行は禁止された。勉強もしなくなった。それでいて成績だけを気にする。私の学校でいうと生徒の半数の家庭は欠損家庭だ。片親しかいない。多くは外国に出稼ぎに出ている。家庭のお金は増え、子どものこづかいも増えた。教師よりもいいものをもつ生徒が多い。しかしその家庭環境は悪化している。

95年ごろは経済的には大変だったが、人間関係はまだ良かった。親も教師を助けてくれた。しかし今は自分の利益に関係がないことには無関心だ。教師と生徒の関係も悪化し、教師は生徒をののしり、生徒は教師を尊敬しない。

とはいえ校長のいい学校は少しずつ改善されている。私の学校も新校長になり、少しは良くなった。教師は時間を守るようになり、授業研究の発表会もするようになった。校長は教師の態度をよく観察し、いい教師の待遇は改善される。親の意見を聞くような機会を作り、投書箱もつくった。生徒から集めた授業料があまると、用紙を買って生徒に配った。私の属する外国語教師のグループは外国語週間を毎学期開き、授業の成果を発表したり、公開授業をする。こうした空気が学校には出始めている。教師の研修も盛んになりつつあって、セミナーに参加すると12回が1単位となり、12単位で新しい資格を取得できる。しかしセミナーはほとんど講義形式で、ワークショップとか実習ではない。

小出コメント

中西の話は、90年前後およびそれ以降のウランバートル市の町の様子と、最近の都市部の学校状況をよく現している。ここに表現されている世界が、モンゴル世界の表側である。モンゴルの歴史や伝統と切り離された“市場経済社会”なるものの表の側面を短く簡潔に表現している。また市場経済社会の“申し子”である子供たちとその家族や学校の赤裸々な姿も表れて

いる。ここに描かれた世界は私がこの国に来て受けた印象とそれほど大差はない。また現場の教師達が苦悩している世界はまさにこのような世界である。日本の教師や家族が抱えている苦勞と共通の世界がここにはある。

しかしこうした世界を告発するだけではだめで、こうした問題を解決できる新しい芽を現実世界の中に見出さないといけない。今回試みてきたヒアリング記録「モンゴル—人と教育改革」はそのためのささやかな調査記録である。とくに今回の報告（3）では学校現場の教員およびそれに近いところで働いている各種管理職の証言を得た。そこには前回まで見た（1）と（2）の記録とは違った内容の「証言」があった。彼らは、90年以前の教育に対しても、また90年以後の教育に対しても鋭い批判を持っている。しかし同時に彼らは教育の現場で改革の努力をしている。その努力は今回の報告（3）の中に読み取ることができる。私が彼らから得た教訓は、モンゴルにおいても教育改革の芽は学校現場にあるということだ。この点については次回の報告（4）で触れたい。

このあとは最低限必要な補充調査を含めて、「社会主義から市場経済社会への移行期の証言」をいろいろな視点からまとめることとしたい。
(文中敬称略)